

羽 室 遺 跡

大分県立別府羽室台高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

大分県教育庁埋蔵文化財センター

羽 室 遺 跡

大分県立別府羽室台高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書は、大分県立別府羽室台高等学校の建設に伴い、大分県教育委員会が実施した羽室遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する別府市は、県都大分市に次ぐ大分県第2位の人口を持つ都市で、調査が実施された昭和58年当時、別府市内に開校されていた公立高等学校は3校ありました。しかし増加する生徒数に対応が難しく普通科の県立高等学校の新設が望まれたことから、昭和58年に別府湾を望む市内野田地区に別府羽室台高等学校という校名で開校しました。その後、生徒数の減少化が進み平成26年別府青山高等学校、市立別府商業高校と統合し平成29年3月31日にその歴史を閉じることになりました。

建設工事に伴い、試掘調査を実施したところ、対象地に遺跡が存在することが確認されたため本調査を実施する運びとなりました。

今回の羽室遺跡の発掘調査の結果、旧石器時代の遺物包含層や縄文時代の竪穴建物跡、また弥生時代の集落の一部と見られる竪穴建物跡や貯蔵穴などの遺構、中世の柱穴群などが検出されました。

調査による成果が、別府市の歴史の一部を解明するとともに、埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査にご支援ご協力をいただきました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 後藤 一重

例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が実施した大分県立別府羽室台高等学校の建設に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する羽室遺跡は、昭和57年度に発掘調査を実施し、平成28年度に整理作業を行った。
- 3 発掘調査は大分県教育庁管理部文化課（当時）が行った。
- 4 出土遺物の洗浄・注記・接合・実測については平成28年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。
- 5 出土遺物の撮影は井 大樹 松木晴美 加島英大が担当した。
- 6 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 本書で使用する方位は、座標北である。
- 8 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SH（竪穴建物跡）、SK（土坑）、SD（溝）、ST（石棺）
- 9 本書の執筆は、第3章第2節遺構と遺物の内、旧石器時代は綿貫、それ以外は江田が担当した。
また、第4章まとめの内、旧石器時代は綿貫、それ以外は江田が担当した。
- 10 本書の編集は江田・松木が行った。

目 次

序 文 例 言

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織の構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	4
第1節 調査の概要	4
第2節 遺構と遺物	4
第4章 まとめ 総括	43
遺物観察表	45

第1図 羽室遺跡の位置と周辺遺跡	3	第17図 SK12 実測図	17
第2図 羽室遺跡遺構配置図	5	第18図 SK13 実測図	18
第3図 SH01 実測図	12	第19図 ST01 実測図	19
第4図 SH02 実測図	12	第20図 旧石器時代の遺物分布図と断面図	20
第5図 SH03・SH04 実測図	13	第21図 旧石器時代の遺物実測図	21
第6図 SK01 実測図	14	第22図 旧石器時代の遺物実測図	22
第7図 SK02 実測図	14	第23図 旧石器時代の遺物実測図	23
第8図 SK03 実測図	14	第24図 SH01 出土遺物実測図	24
第9図 SK04 実測図	15	第25図 SH02 出土遺物実測図	25
第10図 SK05 実測図	15	第26図 SH03 出土遺物実測図	25
第11図 SK06 実測図	15	第27図 SH03 出土遺物実測図	26
第12図 SK07 実測図	15	第28図 SH03 出土遺物実測図	27
第13図 SK08 実測図	16	第29図 SH03 出土遺物実測図	28
第14図 SK09 実測図	16	第30図 SH03 出土遺物実測図	29
第15図 SK10 実測図	16	第31図 SH04 出土遺物実測図	29
第16図 SK11 実測図	16	第32図 SH04 出土遺物実測図	30

挿図目次

第33図 SH04 出土遺物実測図	31	第41図 包含層南西部 出土遺物実測図	36
第34図 SD01 出土遺物実測図	31	第42図 包含層北西部 出土遺物実測図	37
第35図 SK01 出土遺物実測図	32	第43図 包含層北西部 出土遺物実測図	38
第36図 SK01 出土遺物実測図	33	第44図 包含層北西部 出土遺物実測図	39
第37図 SK12 出土遺物実測図	34	第45図 包含層北西部 出土遺物実測図	40
第38図 SK13 出土遺物実測図	34	第46図 包含層一括出土遺物実測図	41
第39図 包含層北東部 出土遺物実測図	35	第47図 表採出土遺物実測図	41
第40図 包含層南東部 出土遺物実測図	35	第48図 表採出土遺物実測図	42

表目次

遺物観察表①	45
遺物観察表②	46
遺物観察表③	47
遺物観察表④	48

写真図版目次

図版1 調査区南東を望む 調査区北西より	図版4 出土遺物 1～13 14・16・20・25・26・30・ 31・33・35・37～39・42・ 46～48
図版2 SH01 発掘状況 SH01 完掘状況 SH01 遺物出土状況 SH02 発掘状況 SH02 中央付近のカーボンの様子 SH03 発掘状況 SH03 遺物出土状況 SH03 完掘状況	図版5 出土遺物 49～51・55・57～60・63・ 65・66・69・71・74～78・ 81・84・85・93・99・101・ 102・105・107・111・116 図版6 出土遺物 117・120・121・126・127・ 132・138・141～146・154・ 156～158・161・162・167・ 169・170
図版3 SH03 中央付近の凹みの様子 SK01 発掘状況 SK01 遺物出土状況 SK02 発掘状況 SK13 発掘状況 ST01 石棺 旧石器時代遺物出土状況①②	図版7 出土遺物 171・172・176・179～182・ 184～186・188・189・193・ 195～197・201・209・210・ 215・217・219・220

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

別府市野田地区は市街地近くでは珍しく自然景観に農村風景を残している。この一帯には、縄文時代や弥生時代の土器が採集される野田遺跡がある。

この地区で最も閑静な羽室地区が新設高校の予定地に選ばれたのは、昭和56年7月頃であり、大分県教育庁理財課(現 教育財務課)より文化財保護法第57条の3による届出が提出された。これをうけて大分県教育庁文化課は同年8月に7日間にわたって試掘調査を実施した。試掘調査の結果、予定地の大部分は畑地であったため、開墾時の造成によって基盤層が露出しているものの、北側地区では表土層・黒褐色土層・ローム質土層が残っており、柱穴群、弥生時代竪穴建物跡等の遺構を確認することができた。

これらの遺構が残されている範囲は東西70m、南北100mほどであり、しかもこの部分は学校施設建築工事によって削平される部分にあたるため、翌57年度に事前の本調査を実施することとなった。

本調査は57年4月20日から開始した。表土は斜面の上部から重機で除去し、その後遺構検出作業を人力によってすすめた。遺構検出時に旧石器～中世までの大量の遺物が出土した黒褐色土、旧石器時代の遺物が出土した調査区西半部のローム層や縄文・弥生の遺構は密度は低い調査区のほぼ全面で確認した。この他ビットは削平部を除く調査区ほぼ全域で分布がみられた。

発掘調査は約4カ月間継続し、8月末に終了した。また、9月初旬理財課(当時)との協議の上、調査中確認された縄文時代の竪穴建物の埋土保存工事を実施し調査を完了した。

第2節 調査組織の構成

○調査主体

大分県教育委員会

○調査指導員

賀川 光夫(別府大学教授)

○調査員

後藤 宗俊(大分県教育庁管理部文化課文化財専門員)

清水 宗昭(大分県教育庁管理部文化課主任)

○調査担当者

高橋 徹(大分県教育庁管理部文化課主事)

江田 豊(大分県教育庁管理部文化課嘱託)

○調査補助員

綿貫 俊一(別府大学文学部研究生)

なお氏名に続く役職名は、当時の職名である。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

羽室遺跡が所在する別府市は瀬戸内海の一部である別府湾の奥まった一角にある。市の西部には標高1375mの鶴見岳及び標高1584mの由布岳が連なっており、別府湾とその背後に連なる山の景観は大分県を代表する風景として県民に親しまれている。また、鶴見岳の北には、伽藍岳（1045m）、猫が岩山（722m）などの山々があり、そこから北東部に鹿鳴越山地が展開する。別府市は、鶴見岳や鹿鳴越山地の東麓部にあたり、火山活動時の火砕流が堆積されて形成された一大扇状地となって別府湾に接している。隣市である大分市側から別府市をみると扇状地という地形的特徴がよく見ることができ、さらに全国第一位の湧出量を誇る温泉の湧けむりが、至るところから立ち上っている。

今回調査を行った羽室遺跡は別府市北部の標高110m～120mの北鉄輪丘陵東側斜面一帯を占地しており、当遺跡の反対側の北東斜面を下ると亀川地区に到る。

第2節 歴史的環境

別府市には平成28年現在43箇所の遺跡が確認されている。

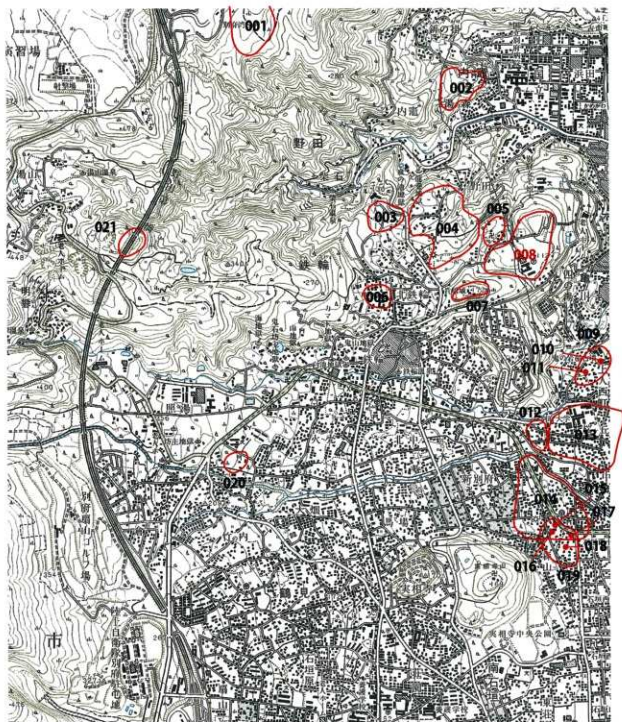
旧石器時代の遺跡は、今回調査を実施した羽室遺跡以外確認されている遺跡数は少ない。縄文時代に入ると、扇状地上端部の標高300m前後の緩やかな起伏を持った丘陵地域に縄文早期の押型文土器とともに集石遺構が複数確認された十文字原第1遺跡がある。また、羽室遺跡から西約700mに同じく縄文早期の遺物が出土する野田遺跡がある。羽室遺跡から南方約2kmの場所に縄文後期中葉の西平式土器が出土した実相寺春木遺跡がある。このほか春木遺跡、末行遺跡、四郎丸遺跡など縄文時代後晩期の遺跡がある。

弥生時代には、遺跡が次第に増加する。平田遺跡、四郎丸遺跡、矢上遺跡、末行遺跡、円通寺遺跡、中須賀遺跡、上人遺跡などが代表的な遺跡といえる。これらの遺跡は大半が実相寺地区周辺で確認されているものである。このうち実相寺春木遺跡では15基に及ぶ竪穴建物が確認され、その後その成果を元にして原寸大の住居を実相寺古代公園に復原保存している。また、円通寺遺跡では、複数回の調査が実施され弥生時代後期の遺物や遺構が確認された。

古墳時代から飛鳥時代には、6世紀後半～7世紀代に築造されたと考えられる鬼の岩屋古墳群、実相寺古墳群が別府市を代表する古墳といえる。鬼の岩屋古墳群は2基あり、ともに巨大な石室構造をもつ円墳で、壁画装飾も残されている。また実相寺古墳群はかつて次郎塚・太郎塚古墳群とも呼称されていたが、平成29年度に国指定史跡「鬼ノ岩屋古墳」に実相寺古墳群が追加指定された。追加指定された実相寺古墳群は、方墳の鷹塚、円墳の太郎塚、次郎塚の3古墳であり、太郎塚古墳から金銅製唐草文透彫鏡板が出土している。

また、実相寺古墳群に隣接する春木吉元遺跡では、民間開発に関わる調査で石棺が複数確認されている。

このほか、奈良・平安時代では見るべき遺跡は現在のところ知られていないが、中世に入ると、市内明雲地区のふいが城遺跡や野田地区に所在する竈門氏墓地などがあげられる。ふいが城遺跡は、九州横断自動車道建設工事に伴う分布調査で発見された山城で、山頂部を平坦に整形し周囲に曲輪を巡らせていた。また、羽室遺跡から西へわずか700mという場所に竈門庄の地頭職にあった竈門氏墓地が所在する。ここには、嘉元4（1306）年の銘が刻まれた五輪塔を含め、23基の石造品がある。羽室遺跡を含め、この地域一帯に鎌倉時代以降有力者の拠点地域に含まれていたことがうかがえる。



- | | | |
|-------------|---------------|---------------|
| 001 扇山遺跡 | 008 羽室遺跡 | 015 次郎塚古墳 |
| 002 湯の森遺跡 | 009 鬼ノ岩屋古墳群 | 016 太郎塚古墳 |
| 003 北鉄輪遺跡 | 010 鬼ノ岩屋古墳1号墳 | 017 天神畑古墳 |
| 004 野田遺跡 | 011 鬼ノ岩屋古墳2号墳 | 018 鷹塚古墳 |
| 005 龜門氏墓地遺跡 | 012 元林遺跡 | 019 実相寺古墳群 |
| 006 宮園遺跡 | 013 円通寺遺跡 | 020 火男火亮神社地遺跡 |
| 007 貴船城遺跡 | 014 春木芳元遺跡 | 021 ふいが城遺跡 |

第1図 羽室遺跡の位置と周辺遺跡

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

羽室遺跡の調査は、重機による表土剥ぎの後に、10m×8mのグリッドを設定し遺構検出作業を行った。調査区は、西向きに下る緩斜面上にあり、標高114mの等高線付近及び115～116mの等高線付近は大きく削平を受け遺構が検出されなかった。この斜面は、かつてスギの植林地であり、植林地の造成工事の際に遺構が消失したもののと思われる。基本土層は、表土下に黒褐色土があり、この層中に遺物が含まれていた。この層を掘り下げるとローム層が現れる。遺構は、この層の上面で検出されたが、遺構検出作業中に調査区西側において旧石器時代の遺物が採集されたことから、さらに旧石器時代の遺物を確認するため小グリッドを設定してローム層の掘り下げを行った。

発掘調査では、旧石器時代のツールや剥片類、縄文時代後期前半から中葉の竪穴建物跡1基、弥生時代の竪穴建物跡4基、貯蔵穴2基、小児用石棺墓1基、中世の溝1条、土坑1基、時期不明の土坑10基及び多数の柱穴が確認された。さらに、黒褐色土層中から弥生土器を中心に多数の遺物が出土したため包含層一括資料として遺物の取り上げを行った。

第2節 遺構と遺物

旧石器時代（第20～23図）

羽室遺跡は、鉄輪方面から東方へ延びる台地が北側へ回り込むような地形をした台地東部にあって、西側に向けて標高が低くなる緩斜面に立地している。この緩斜面上のローム層上で弥生時代を中心とする遺構検出作業を実施している際にローム層にくい込む状況で旧石器時代の石器類が散発的に出土していた。その他、遺構の中や土器包含層の中に混在する状況で見つかった資料もある。そこで出土状況を探るために、散発的に分布する石器、剥片などが最も多い部分を集中的に掘り下げた。そうした場所の一つが、旧石器集中地点とした部分である（第20図）。出土層に対する明確な区分をしていないが、黒色帯層より上位にある黄褐色系ローム質の粘土層である。まず最初に、旧石器集中地点からの出土資料を報告し、次に包含層などからの資料を報告する。旧石器集中地点は、調査区の西部に位置し、北から東へ低くなる斜面地形に沿うように分布している（第20図）。その主要分布域は、東西約8m、南北3mの範囲である。全資料は41点である。このうち石器関連資料は、7点であったが、他は小さな焼礫であった。こうした焼礫は、おそらく礫群の残骸が崩壊したものであろう。極めて小規模であるが、石器ブロックと考えられる。

【旧石器集中地点の資料】 ナイフ形石器（第21図1）が1点出土している。やや縦に長い不定形の剥片を素材に用いており、裏側のボジ面を加撃面として表面側の左側縁に整形痕を残す。側面形をみると、上位の方で薄くなりつつあり、破損しているものの上端部は尖っていたと推定される。石材は、姫島産の角閃石安山岩であり、その性質から、あまり良好な素材剥片でなかったことがうかがえる。剥片は5点出土している。1点目（第21図6）は、横断面が三角形に近い台形で、剥片剥離の破砕剥片である。石材が、鉄石英もしくは赤チャートと推定される固く粘りのない石であり、不規則な割れが生じやすい石材である。2点目の剥片（第21図7）は、縦に長い剥片であるが、ネガ面に石核調整時の剥離が多方向から行われている。石材は、大野川系の流紋岩である。3点目の剥片（第22図8）は、打面調整時の剥片で、石材は大野川系の流紋岩である。石核（第22図9）は、剥離が進行し、形が舟形となった残核である。石材は、大野川系の流紋岩である。接合資料（第22図8・9）は上記の剥片（第22図8）と石核（第22図9）の接合例である。剥片が石核の打面部から打面作出剥片として剥離されたことがわかる。4点目の剥片（第23図10）は、石核剥離時の剥離が右から左方向へ向けて行われた痕跡を残している。5点目の剥片（第23図12）は、ネガ面、ボジ面とも上方から下方へ剥離が行われた剥片で、二次加工時の整形剥片かもしれない。幸田系黒曜岩を石材とする。

【その他の場所出土した資料】 加工痕ある剥片（第21図2）は、幅広剥片を半裁した剥片を素材としている。



第2図 羽室遺跡遺構配置図

ボジ面の右下に急角度の加工があり、あるいはナイフ形石器とも考えたが、それにしても形が整っていない。石材は大野川系の流紋岩。角錐状石器（第21図3）は、やや縦に長い先細りの剥片を素材に用いており、裏側のボジ面を加撃面として表面部の尖端部に細かい整形痕を残す。石材はチャートである。剥片（第21図4）は、斜行する剥片で、ボジ面に石核から剥離時の幅広剥片剥離痕が残る。石材はサヌカイトである。剥片（第21図5）は、打面が破損しており、剥離時の衝撃破砕剥片であろう。石材はチャートである。使用痕ある剥片（第23図11）は、石核剥離時の同一方向剥離痕を有する半円形の剥片を素材とした剥片である。石材は大野川系の流紋岩である。石核（第23図13）は、やや幅広い石核で表裏に幅広剥片の剥離痕が残る。石材は大野川系の流紋岩である。

縄文時代

SH01（第3図）・（第24図）

調査区北西部、柱穴が集中する平坦部分で検出された。東西3.7m×南北3.4mの円形竪穴建物跡である。床面は、2段構造で中央に東西1.8m×南北1.7m、深さ約0.1mの円形の落ち込みがある。壁は垂直に立ち検出面から平均して20cmほどの高さをもち、伊跡は確認されなかったが、焼土が北側の1段目の床面で数か所確認された。中央に1基ある柱穴が主柱穴と思われるが、床面には他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、第24図に示している。14～18が深鉢の口縁部、19～22は深鉢の胴部、23～24は深鉢底部、25は石斧である。14、15は口縁部が肥厚し、平坦に仕上げた口縁端部に沈線を巡らすことで凹状の断面を呈する。いずれも横方向に複数の沈線を巡らしている。16は直行する口縁部から胴部が張り出す場所に縄文と沈線で構成される入組渦文が施されている。縄文土器はいずれも床面直上で出土している。25は埋土中から出土したもので流れ込みの遺物である。石材は珸岩で、長さ10.3cm×幅4.3cmの磨製石斧である。出土遺物から、SH01の時期は縄文時代後期と考えられる。

弥生時代

SH02（第4図）・（第25図）

調査区北東部、斜面の最も上位で検出された。東西1.65m×南北2.25m、深さは0.4～0.5mを測る。平面は長方形、北壁はやや傾斜を持ち立ち上がるが、その他の壁はほぼ直立する小型の竪穴建物である。中央付近に大量の炭化物とともに炭化材が出土した。主柱穴は確認することができなかった。出土遺物として、26の縄文時代後期とみられる深鉢の口縁部が出土した。27は壺で、「く」字状に短く外反した口縁部に穿孔が施されている。28は壺の胴部、断面が「M」字状の突帯を1条貼り付けている。29～31は壺、口縁部は「く」字状に外反し、端部がやや跳ね上げ状口縁に仕上げられている。30、31は口縁部直下に断面三角形の突帯が貼り付けられている。32～33は壺の底部で、わずかに上げ底状に仕上げている。34は器台である。

SH03（第5図）・（第26～29図） SH04（第5図）・（第31～33図）

調査区やや北東寄りの標高115～116mの斜面上に位置する。調査区が立地する斜面において、この標高のエリアは後世の削平が著しい場所で、SH03及びSH04はいずれも遺構上面を削られていた。切り合い関係からSH04→SH03と考えられる。なお、SH04は遺構の大半が削平されていた。SH03は東西3.5m×南北4.7mの方形の竪穴建物である。北側に幅0.6mほどの小さな張り出しを持つ。床面の7つのピットは、いずれも不規則で明確に柱穴といえるものは確認できなかった。また、中央には1.4×1.2mの略方形の落ち込みがあり、その内部には小ピットが不規則に並ぶ。焼土等は確認されなかったが伊跡と思われる。このSH03の西側を切るようにSH04が位置する。形は不整形で、大きさは特定できない。柱穴等も確認されなかった。SH03の出土遺物は、35～60である。35は長頸壺で、口縁部をわずかに肥厚させ、その端部を平坦に仕上げる。端部直下に断面三角形の突帯を1条、その下部に断面台形状の突帯が5条以上巡る。36～38は壺で、36は頸部に3条の突帯が巡る。37及び38は鐏先状口縁で、その上に浮文が施され、外側の先端部分がやや下がり気味になる。39～51は壺の底部である。39は

下城式土器で、直立した口縁部が開き気味に立ち上がり2条の刻目突帯を貼り付けている。46から49は裏で、口縁部は「く」字状に外反し、端部をわずかに跳ね上げている。50は口縁部が内側に張り出すことから、鋤先状口縁を持つ甕と思われる。52～55は甕の底部で、わずかに上げ底状である。57は土製の紡錘車で、直径5.2cm、厚さ1.3cm、重量40.7gである。58は投弾、59は薄手の磨製石器で、先端、基部とも欠けているが石剣の可能性がある。60は先端を片面のみ丁寧に研磨している。石ノミと思われる。

SH04からは、61～77の遺物が出土している。大半は、流れ込みの遺物で、上位にあるSH03の遺物が含まれていると思われる。61～62は壺で、61は断面M字状突帯を貼り付けている。63は器台である。65は下城式土器でほぼ直立する口縁部に1条の刻目突帯を巡らす。66～71はいずれも「く」字状口縁と、端部を跳ね上げる特徴を持ち、SH03とほぼ同様の特徴を持つ。72～74は甕の底部でわずかに上げ底である。75は玉縁の口縁部を持つ白磁碗、76は瀬戸美濃産の銅皿である。いずれも中世遺物の流れ込みである。77は凹石で両面に使用痕が認められる。

SD01（第2図・第34図）

調査区西半部中央部において検出された。東西方向に伸びる長さ約14m、幅2m、深さ0.15mの溝状の遺構である。東側、西側とも溝の端部は削平され消滅していた。遺物はほとんどが細片で、図化できたのは78のみであった。78は備前焼で、口径11cm程度の小ぶりの壺で外面肩部に櫛歯文を施す。

SK01（第6図）・（第35～36図）

調査区北のほぼ中央に位置する。東西1.9m×南北1.6mの楕円形を呈する深さ0.6mの貯蔵穴である。底面は平坦で壁はほぼ直立して立ち上がる。遺物は一部大型破片が含まれるが大半は細片であった。ただ、東側の底面に土器の底部のみを10数点集中して破棄していた。

出土遺物は、79～105である。79は下城式の甕で、やや外反しながら立ち上がる口縁部に刻目突帯を1条巡らせる。81は「く」字状口縁の端部を跳ね上げる甕である。82～104は床面に一括廃棄されていたものであり、大半は甕の底部である。84は脚付の鉢であろう。85は高坏の脚部である。内面に絞りの痕跡が認められる。大部分の甕の底部は、わずかに上げ底を呈する。105は太形蛤刃石斧で、刃部が破損している。SK01は出土遺物から中期後半の所産と思われる。

SK02（第7図）

調査区南西部のSD01付近に位置する。東西1.2m×南北1.4mの楕円形を呈する深さ0.2mの土坑である。上部を大きく削平されており、遺物は出土していない。

SK03（第8図）

SK02と同じく調査区南西部のSD01付近に位置する。東西2.2m×南北2.4mの、深さ0.2mの三角形に近い形の土坑である。床面西側に直径0.9m、深さ0.7mのビットが確認されたが、この土坑に伴うものかは確認できなかった。遺物は出土していない。

SK04（第9図）

調査区南端部に位置する。東西0.75m×南北1.5m、深さ0.25mの楕円形を呈する土坑である。2基のビットが土坑内にあるが、土坑に伴うものかは確認できなかった。遺物は出土していない。

SK05（第10図）

調査区南端部に位置する。東西1.18m×南北1.2m、深さ1mの円形を呈する土坑である。壁はほぼ直立して立

ち上がる。遺物は出土していない。

SK06 (第11図)

調査区南端部に位置する。東西1.35m×南北1.5m、深さ0.6～0.8mの楕円形の土坑である。握り拳大～小児頭大の礫が出土したが遺物は含まれていない。

SK07 (第12図)

調査区南端部に位置する。東西1.85m×南北2.75m、深さ0.1～0.5mの楕円形を呈する土坑である。遺物は出土していない。

SK08 (第13図)

調査区南部に位置する。東西1.3m×南北0.6m、深さ0.6～0.7mの長方形の土坑の北側に不整形な遺構やピットが連続して切り合っている。遺物は出土していない。

SK09 (第14図)

調査区南部に位置する。東西2.2m×南北1.8m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。北側床面に直径0.8m、深さ0.8mのピットが掘られているが、この土坑に伴うものかは確認できなかった。遺物は出土していない。

SK10 (第15図)

調査区南部に位置する。東西1.28m×南北1.42m、深さ1.2mのほぼ円形に近い土坑である。底部は平坦である。遺物は出土していない。

SK11 (第16図)

調査区南部に位置する。東西1.8m×南北1.78mで、底面は2段構造である。東側は0.48m、西側は、深さ0.76mの深さを持つ、円形の土坑である。遺物は出土していない。

SK12 (第17図)・(第34図)

調査区南東の遺構集中地点に位置する。東西3.3m×南北3.6mの不整形な土坑で深さは0.5～0.7mを測る。東壁沿いに直径0.9mのピットが掘られているが、この土坑に伴うものか確認できなかった。出土遺物は、106～108である。106～107は甕の胴部である。断面三角形の突帯を3条巡らせる。108は甕底部である。時期は弥生時代中期後半と思われるが、遺構の覆土中の出土であることから、遺構の時期を明確に示すものではない。

SK13 (第18図)・(第38図)

調査区最高所に位置する。東西3.3m×南北3.6mの不整形の土坑で、深さ1.3mである。上位～中位にかけての層で弥生土器とともに中世の遺物が出土した遺構の性格は、断面形状からは竪穴建物跡とは考えられず、底部から立ち上がる壁面が内傾もしくはわずかに弧を描くことから、大型の貯蔵穴と思われる。遺構上部の壁面が崩落するとともに、上端が広がり不整形な形状を持つ遺構となったと思われる。出土遺物は、ほとんどが細片であり実測可能な遺物は、109～121である。109～114は弥生土器である。109は下城式土器、110～112は「く」字状に屈曲し、うち111は端部をわずかに跳ね上げる口縁部を持つ甕である。114は壺の底部である。115～120は中世の遺物である。116は高台径15cmの青花皿、118～120は備前焼の播鉢、刷目は7～8本単位で施される。121は弥生時代の土製投擲である。

ST01 (第19図)

調査区の南西に位置する。北西部が削平されているため全体の姿はうかがえないが、東西0.5m+ α 、南北1m+ α 、深さ0.3m+ α の土坑内に、東西0.4m×南北0.85mの小児用石棺を設けている。石材は、安山岩を使用しており、蓋石及び南小口側、西側石は散逸している。南側小口は幅0.3m、北側小口は幅0.2mであることから、頭位は南側、北側が足位と想定される。棺床部は、粘土を貼り平坦な面を形成する。遺物は出土しなかったが、石棺の構造及び遺跡出土の遺物から弥生時代中期後半の時期と考える。

ビット (第2図)

調査区西半部の標高112～113mの緩やかな西下りの平坦な場所にビットが集中している。建物が想定されるビットの配置を確認することはできなかった。また、これらのビットの時期については、明確に判断できる遺物の出土もなかった。

包含層

羽室遺跡では、ローム層の上位にある土層が弥生時代の遺物を中心とした遺物包含層であった。調査区の面積が約7,000㎡と広大であるため、北東部、南東部、北西部、南西部と大きく4分割して、遺物の整理を行った。

包含層北東部 (第39図)

122は土師質土器小皿、復元口径7.6cmを測る。123は土師質土器杯、復元口径12.8cmを測る。ともに糸切り底である。杯の底部から体部にかけての立ち上がり強いもので、14世紀代の所産と思われる。

包含層南東部 (第40図)

124は弥生土器甕、開き気味の短い「く」字状口縁である。口縁部直下に突帯を1条貼り付けている。弥生時代中期後半代の所産である。125～127はいずれも備前焼である。125は鐏鉢、126～127は甕である。このうち126は外面に「ハ」字の刻印が残されている。

包含層南西部 (第41図)

128～137は弥生土器である。128は甕で「く」字状の口縁部とその直下に断面三角形の突帯を貼り付ける。129～132は甕である。129は短い口縁部が逆「L」字状に開くもので小型の甕である。131も小型の甕である。口縁部が、短く「く」字状に広がり、蓋を固定するための孔が穿孔されていた。130及び132は弧状に反する甕の口縁である。133は鉢の口縁部である。134～137は底部で、134は甕、135～137は甕の底部である。138は青磁碗の口縁部、139は青磁碗底部である。140は土師質土器杯で、復元口径12.8cm、糸切り底である。141～145は石器である。141及び144は砥石、素材は141が砂岩、144は粘板岩を用い、いずれも割れ面以外はずべての面を使用している。142は姫島産黒曜石を用いたスクレイパー、143は二次加工剥片で、打面を挟む両側片にわずかに使用痕が観察される。145は打製石斧である。

包含層北西部 (第42～45図)

146は縄文土器である。深鉢の口縁部で、外面に沈線が施されている。147～176までは弥生土器である。147～156は下城式土器で、152は口縁部がやや外反気味に立ち上がるが、その他はほぼ直立して立ち上がる。157～160は甕である。157は頸部に巡る突帯の下部にあたる部分で、勾玉状の浮文を貼り付けている。158は長頸甕で、わずかに外反する口縁部に断面三角形の突帯を3条貼り付けている。159は甕の頸部。頸部から体部へと続く部位に刻目を施した突帯が巡る。160は「く」字状の短い口縁部がつく小型の甕である。161～162は鉢もしくは脚付き鉢と思われる。161は口縁端部が外側に強くつまみ出され断面が三角形を呈している。胴部の最大

径付近に突帯を2条巡らす。163と165は鋤先状口縁部を持ち、いずれも口縁端部が垂れ下がり気味である。162は鉢で外面に丹塗りの痕跡が認められる。163は垂れ下がり気味の鋤先状口縁を持つ高坏である。166～168及び174～175は「く」字状口縁を持つ甕である。169～172は甕の底部。いずれも上げ底気味に整形されている。173は蓋である。176は土製紡錘車である。177～187は中世の遺物である。177は土鍾である。178～181は陶磁器類である。178は高台付の碗、180は龍泉窯の青磁碗で外面に連弁の文様が観察できる。181は青磁の香炉である。182は土師質土器小皿で口径7.7cmを測る。183～186は土師質土器坏である。183は復元口径11.8cmを測る。184は口径12.8cm、185は口径12.9cm、186は復元口径10.8cmである。187は土師質の火鉢である。外面に2条の細く低い突帯が回り突帯間に菊花文のスタンプを施文している。188～199は石器である。188～190はいずれも石鐮で姫島産黒曜石を用いている。190は基部が両側とも欠損しているが、長さが4cm近い大型の石鐮である。191は磨製石斧で、刃部の幅は3.8cmの両面を磨いた磨製石斧である。192は磨製の石ノミで、刃部の幅は2.9cmである。193は石包丁で、両端部とも欠損しているが、紐を通す孔が確認されている。194～195は砥石である。196は滑石製の石鐮である。197～198は凹石で、197は両面に、198は両面及び両側面に使用痕が観察される。199は安山岩製の投擲である。

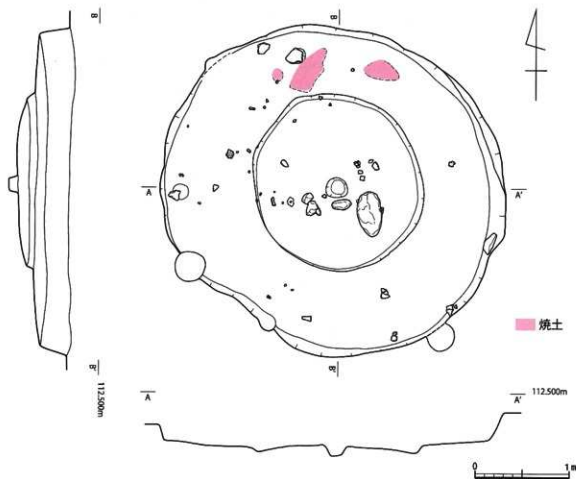
包含層一括（第46図）

包含層から出土した遺物であるが、区域名を明記せず取り上げたため、ここでは包含層一括として取り扱う。200は縄文時代後期の深鉢である。口縁部が大きく肥厚して口縁端部が幅広い。ここに沈線を2条施す。外面にも縦方向に沈線が観察される。201～204は弥生土器である。201は甕で、口縁部がやや弧を描きながら大きく外反する。202は「く」字状口縁を持つ甕、203は甕の底部、204は蓋の底部である。205は土師質土器小皿で復元口径8cm、206は京都系土師器皿、復元口径8.4cmを測る。この小皿は口縁端部にスガが付着していることから、灯明皿として用いられていたと思われる。207は砥石である。

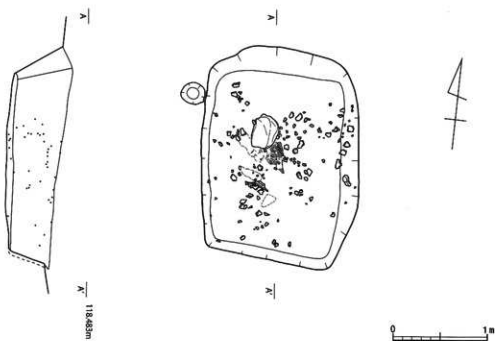
表面採集（第47～48図）

除去した表土中から採集された遺物である。

208は鋤先状口縁を持つ甕、209は甕で、鋤先状口縁先端が垂れ下がり気味で口縁部の直下に断面「M」字状突帯を貼り付けている。210～211は「く」字状口縁を持つ甕である。212は小型の甕で、口縁部は短く屈曲する。蓋を取り付ける孔が穿孔されている。213～215は甕底部で、214及び215は上げ底気味に仕上げられている。216はサヌカイト製の石鐮、217は姫島産黒曜石を用いたスクレイパーである。いずれも縄文時代の所産と思われる。218は砥石である。219は砂岩の円礫の右側片に挟りを入れたもので、用途は石鍾を想定する。220は花崗岩を用いた磨製石斧で、基部から両側片部には成形時の敲打痕が残る。



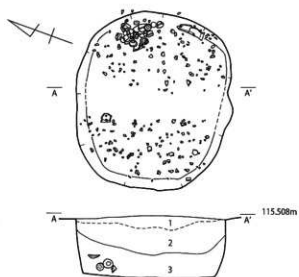
第3図 SH01実測図



第4図 SH02実測図



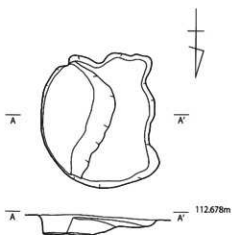
第5図 SH03・SH04 実測図



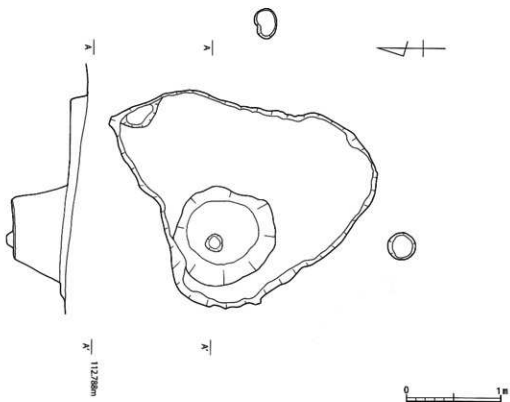
1. 暗褐色土 (黑褐色土混入)
2. 暗褐色土
3. 赤褐色土



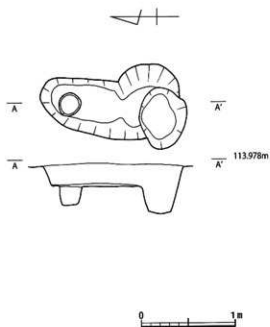
第 6 图 SK01 实测图



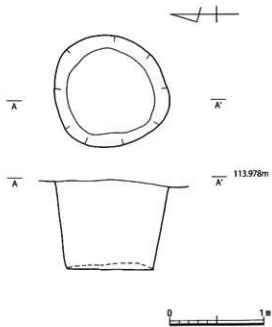
第 7 图 SK02 实测图



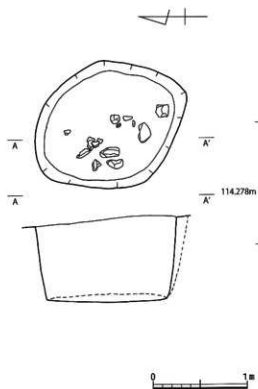
第 8 图 SK03 实测图



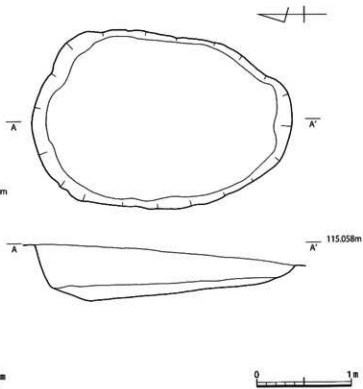
第 9 图 SK04 实测图



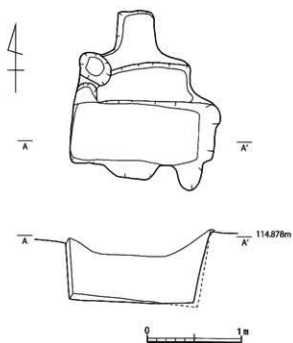
第 10 图 SK05 实测图



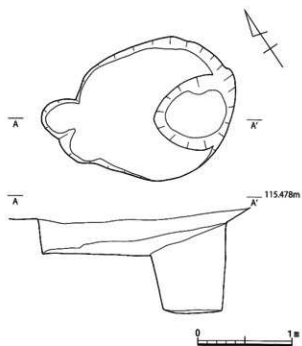
第 11 图 SK06 实测图



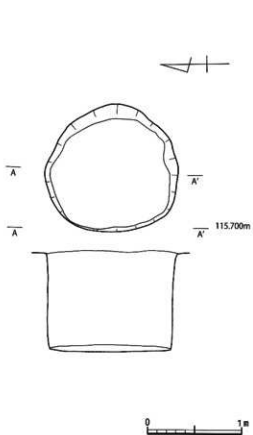
第 12 图 SK07 实测图



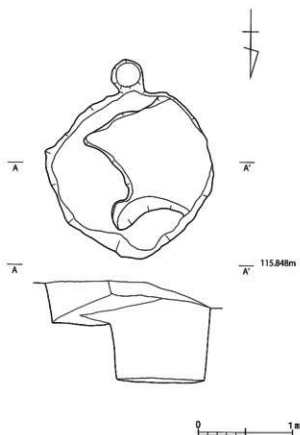
第 13 图 SK08 实测图



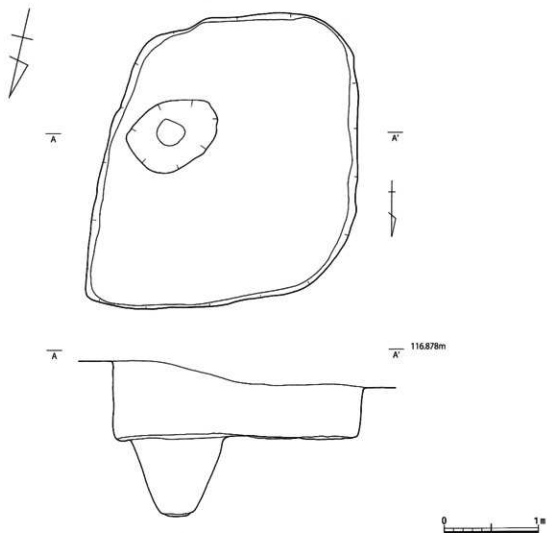
第 14 图 SK09 实测图



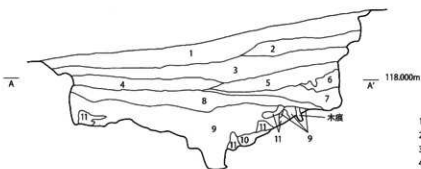
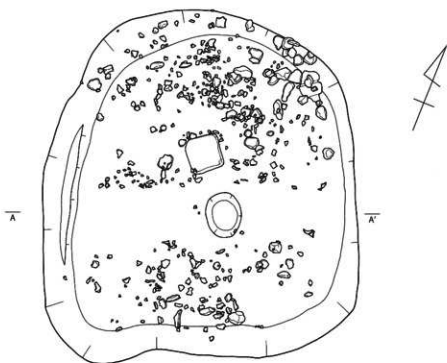
第 15 图 SK10 实测图



第 16 图 SK11 实测图



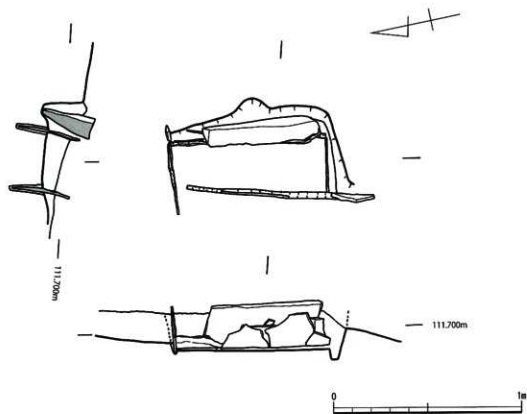
第 17 図 SK12 実測図



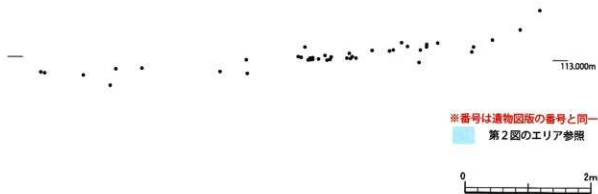
1. 黒褐色土
2. 灰白色土 (地山やヤ含む)
3. 灰白色土 (やや暗)
4. 灰白色土
5. 黄褐色土
6. 灰白色土 (やや暗)
7. 灰白色土
8. 灰白色土 (やや明)
9. 暗黒褐色土
10. 軟質灰白色土
11. 黄色口一ム層



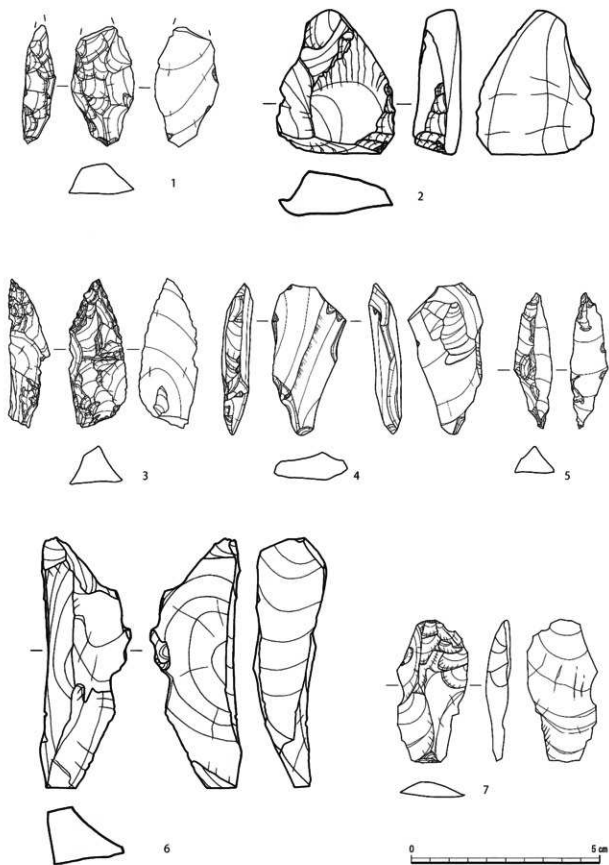
第 18 図 SK13 実測図



第 19 図 ST01 実測図



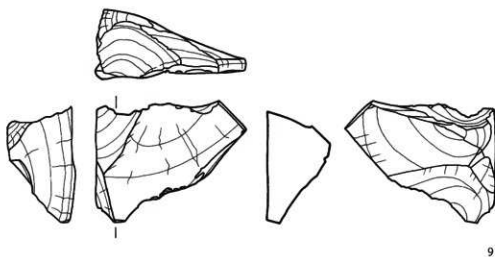
第 20 図 旧石器時代の遺物分布図と断面図



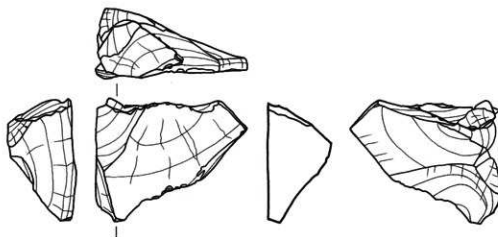
第 21 図 旧石器時代の遺物実測図 1/1



8



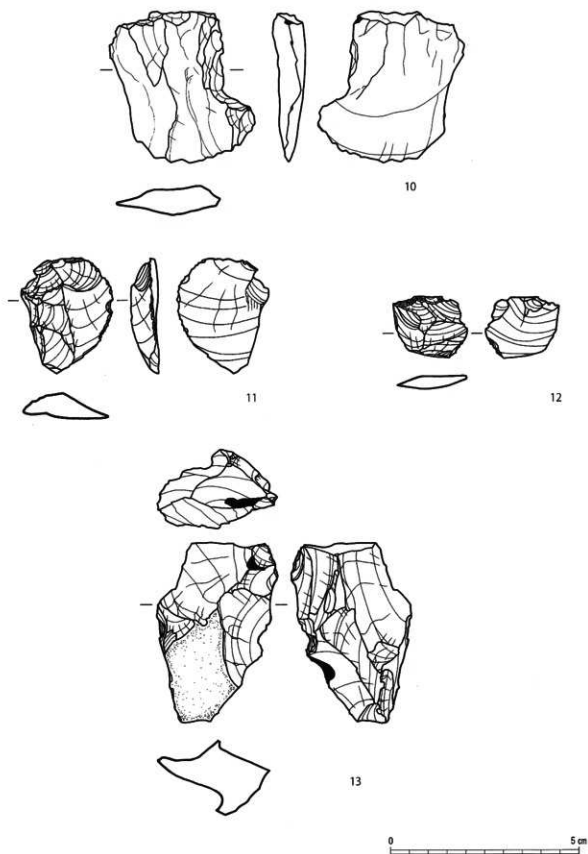
9



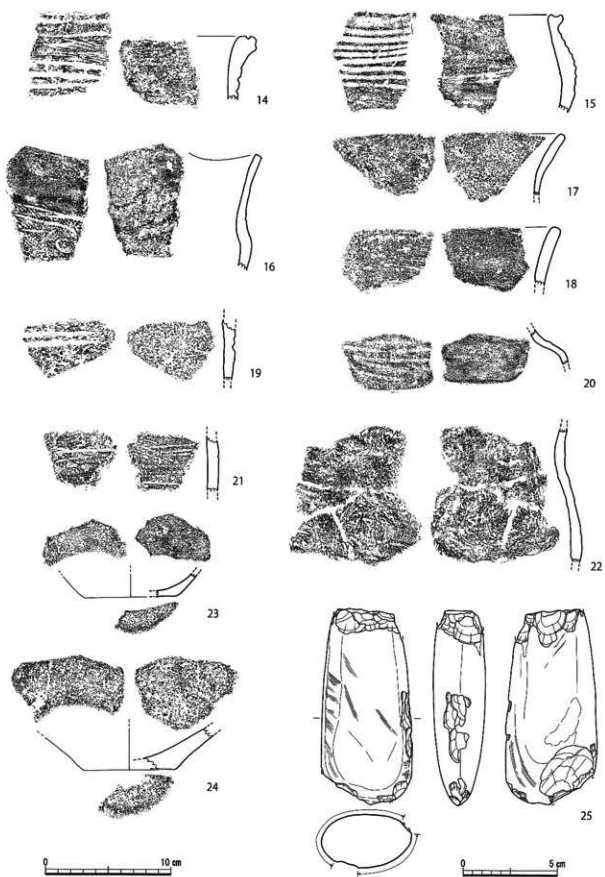
8・9 接合状態



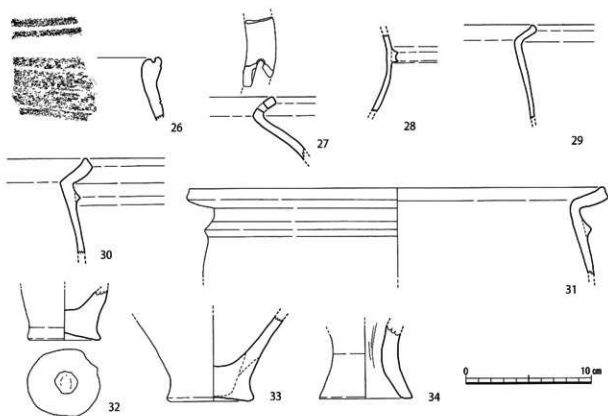
第 22 図 旧石器時代の遺物実測図 1/1



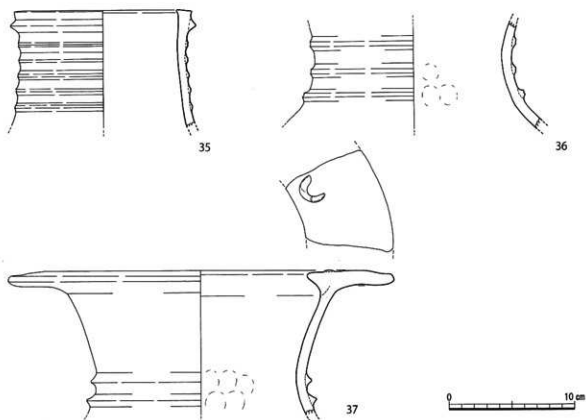
第 23 図 旧石器時代の遺物実測図 1/1



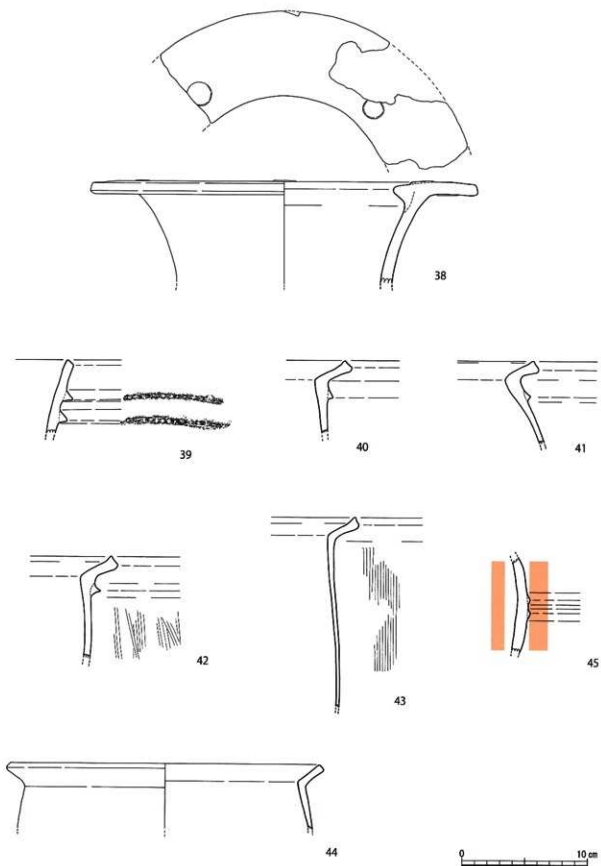
第 24 図 SH01 出土遺物実測図 1/3 (25 は 1/2)



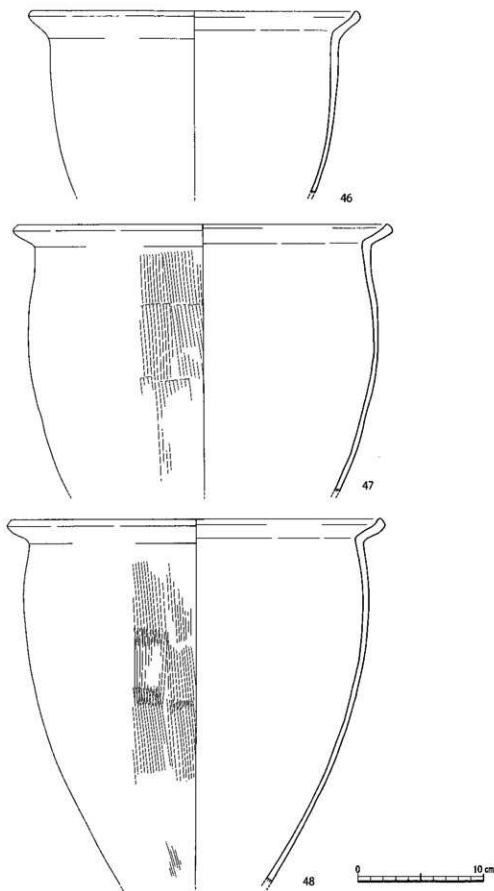
第 25 図 SH02 出土遺物実測図 1/3



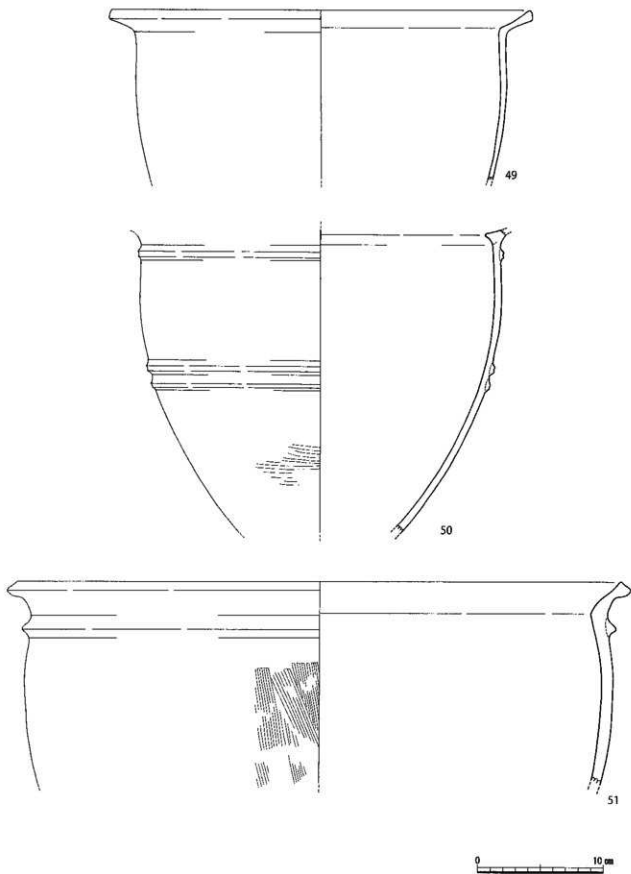
第 26 図 SH03 出土遺物実測図 1/3



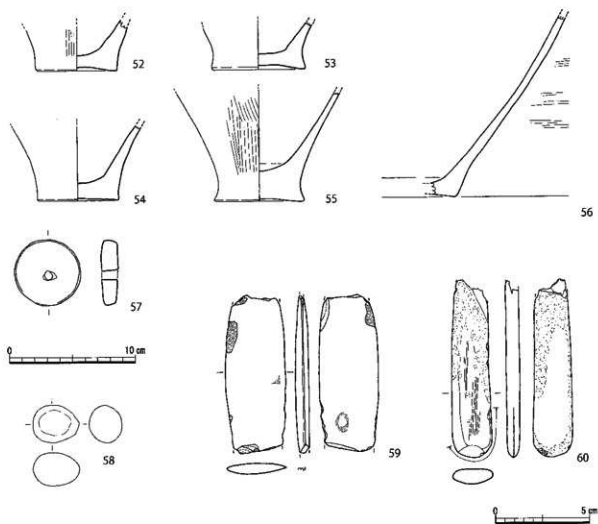
第 27 图 SH03 出土遺物実測図 1/3



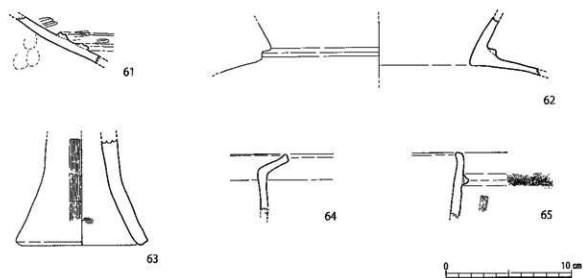
第 28 图 SH03 出土遺物実測図 1/3



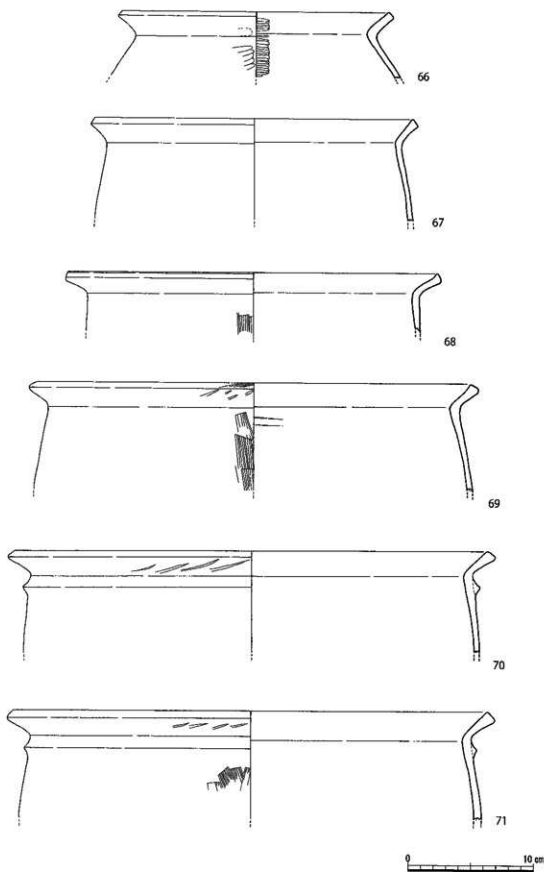
第 29 図 SH03 出土遺物実測図 1/3



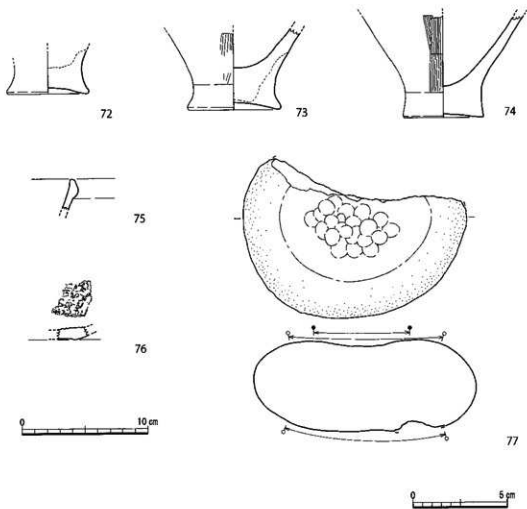
第 30 図 SH03 出土遺物実測図 1/3 (58・59・60 は 1/2)



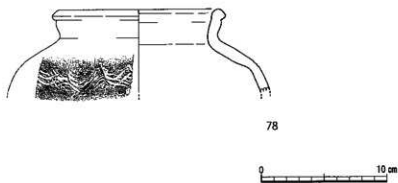
第 31 図 SH04 出土遺物実測図 1/3



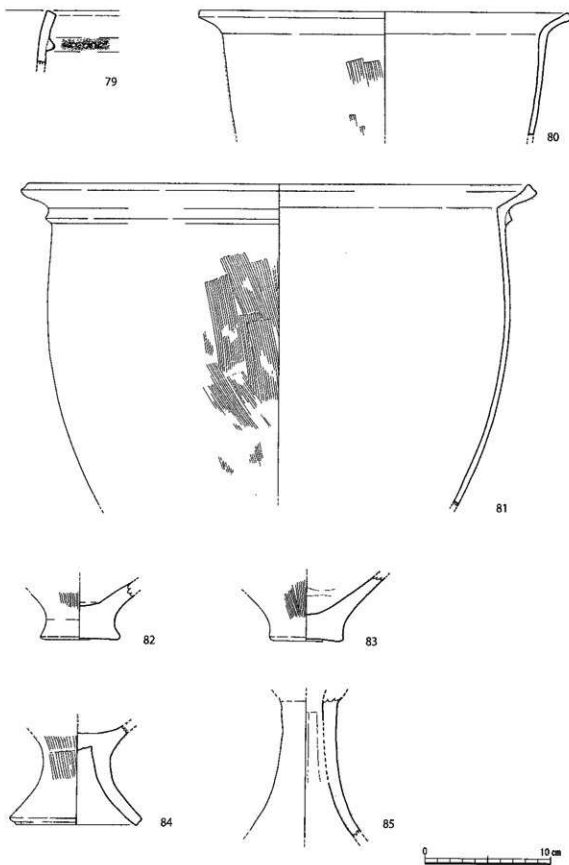
第 32 图 SH04 出土遗物实测图 1/3



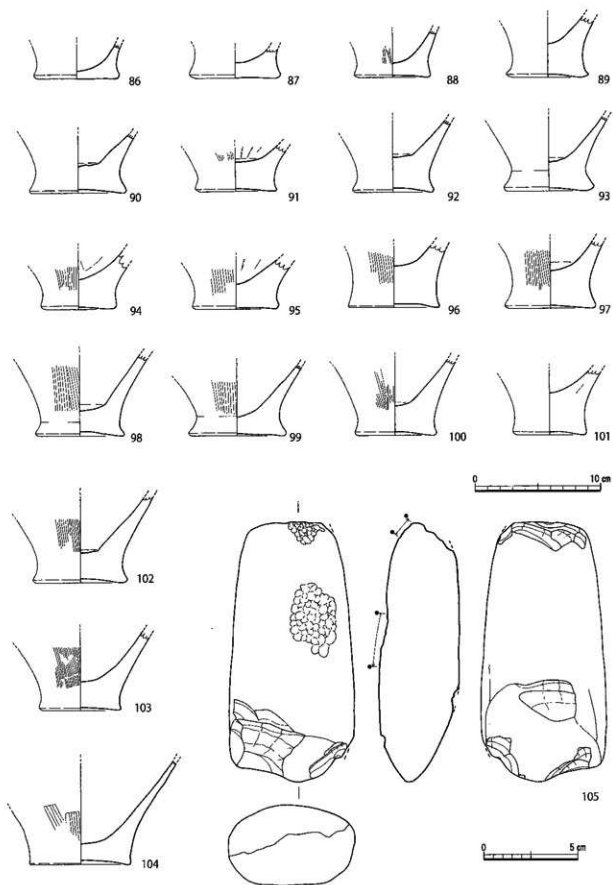
第 33 図 SH04 出土遺物実測図 1/3 (77 は 1/2)



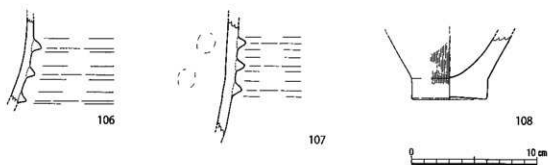
第 34 図 SD01 出土遺物実測図 1/3



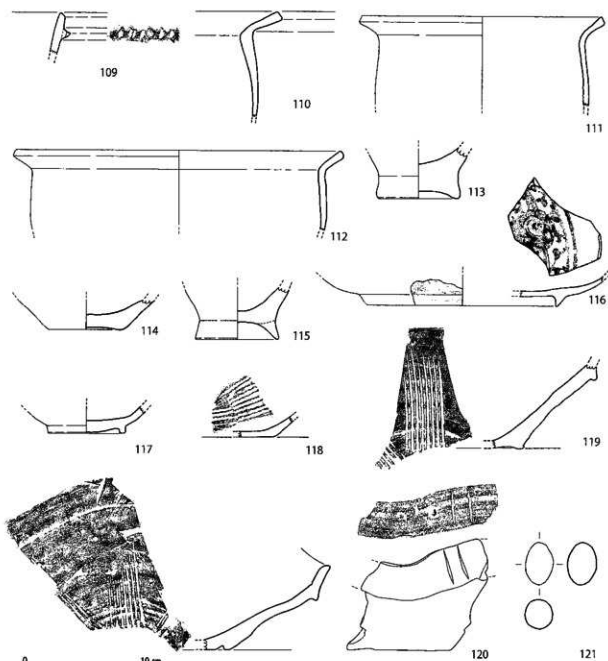
第 35 図 SK01 出土遺物実測図 1/3



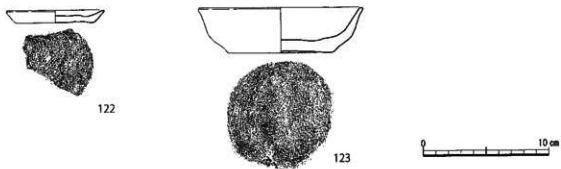
第 36 図 SK01 出土遺物実測図 1/3 (105 は 1/2)



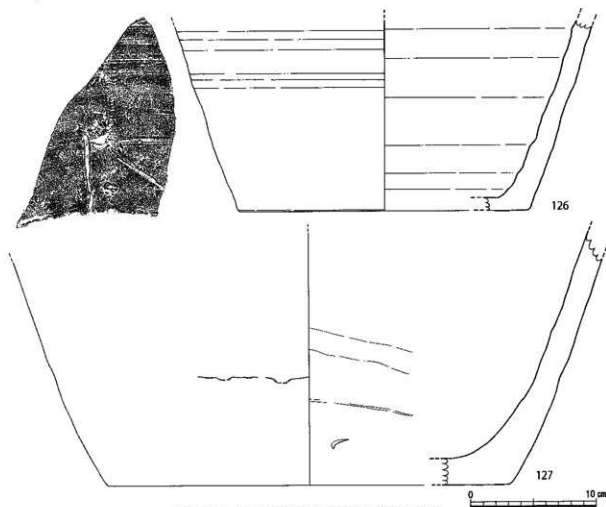
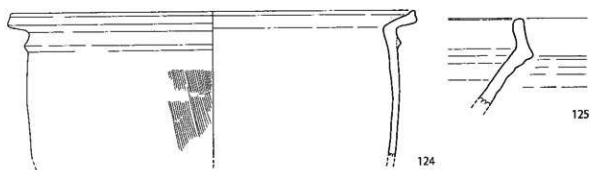
第 37 图 SK12 出土遺物実測図 1/3



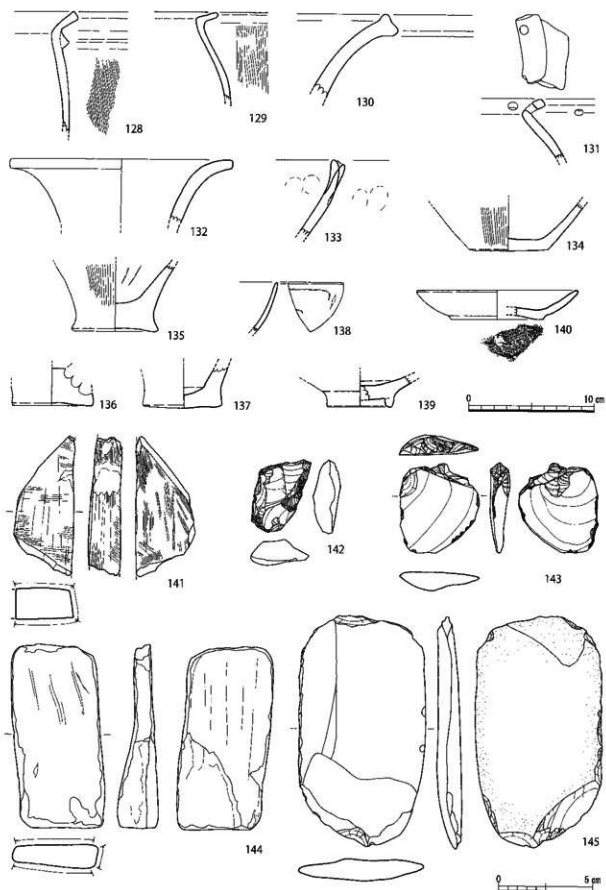
第 38 图 SK13 出土遺物実測図 1/3



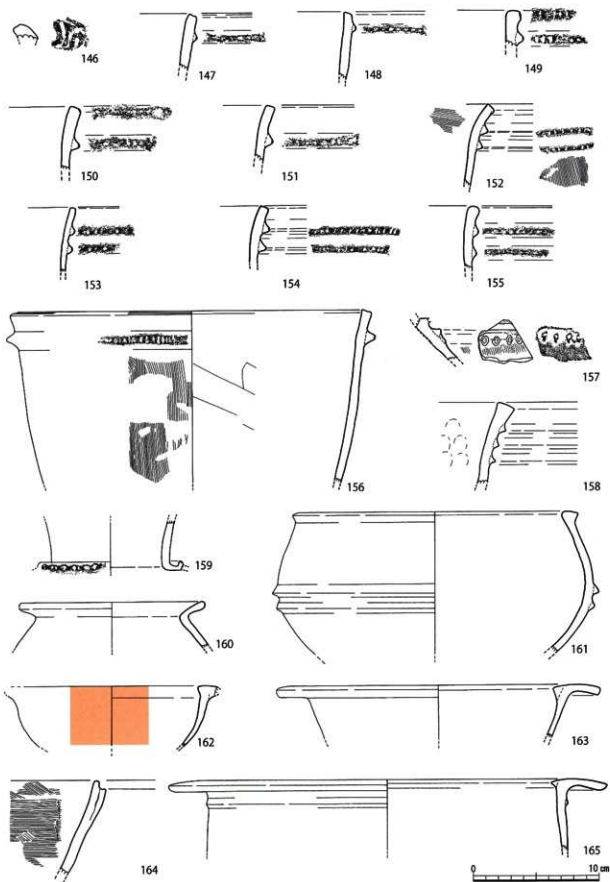
第 39 図 包含層北東部 出土遺物実測図 1/3



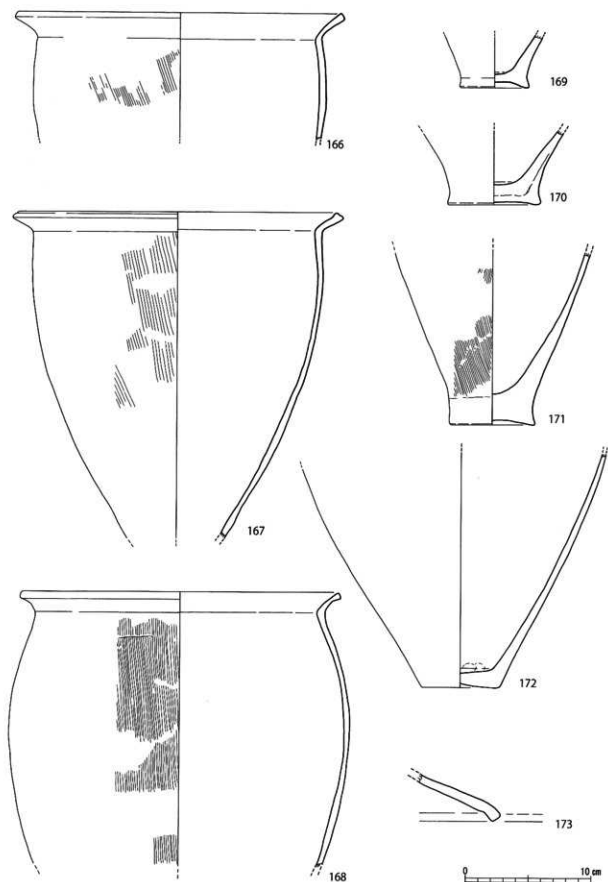
第 40 図 包含層南東部 出土遺物実測図 1/3



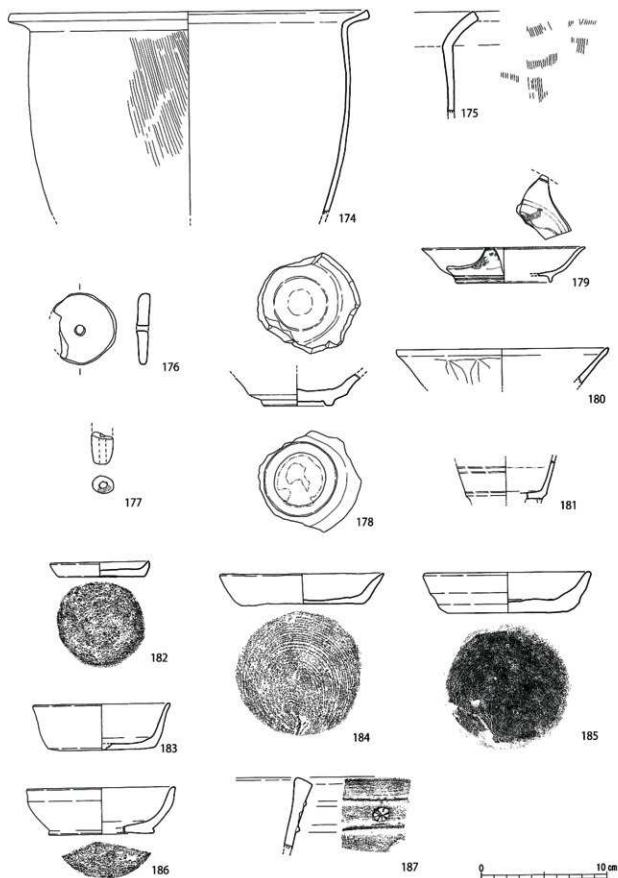
第41図 包含層南西部 出土遺物実測図 1/3 (141・142・143・144・145は1/2)



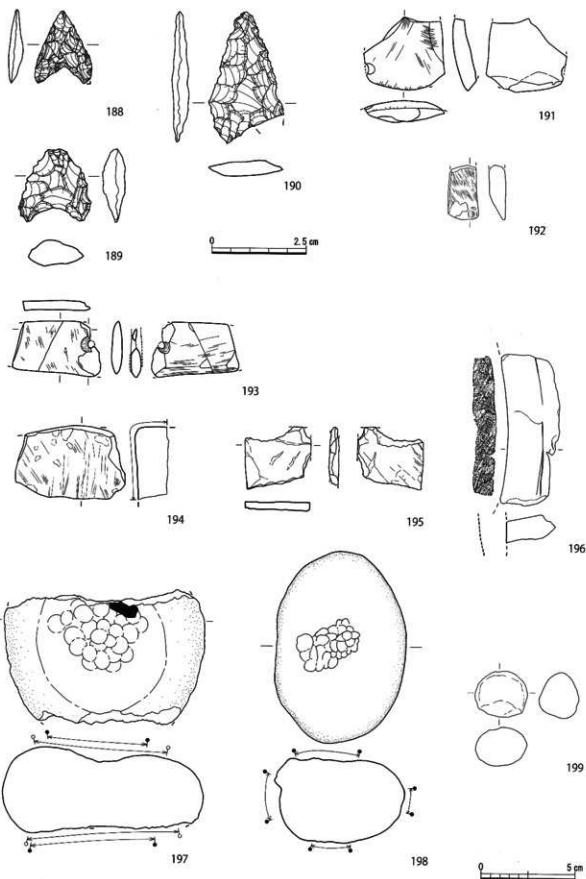
第 42 图 包含層北西部 出土遺物実測図 1/3



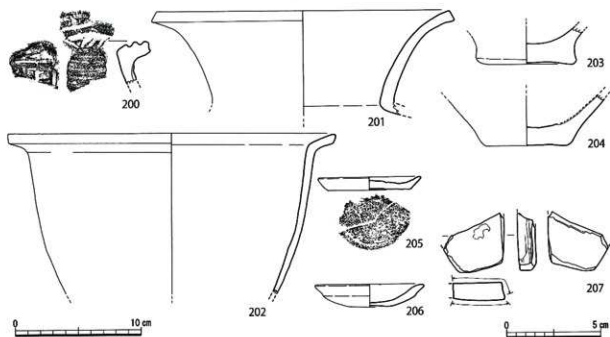
第 43 図 包含層北西部 出土遺物実測図 1/3



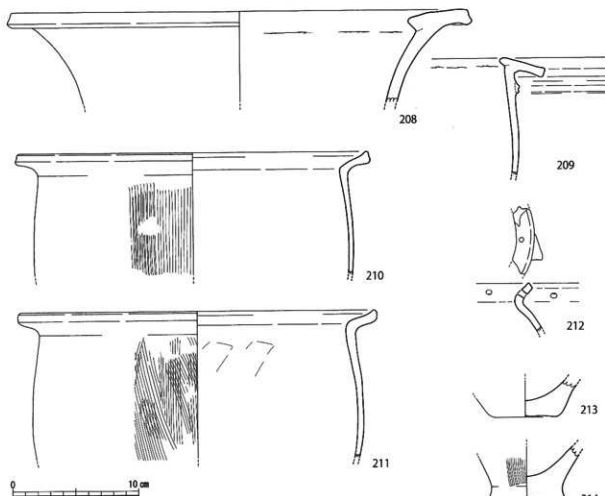
第 44 図 包含層北西部 出土遺物実測図 1/3



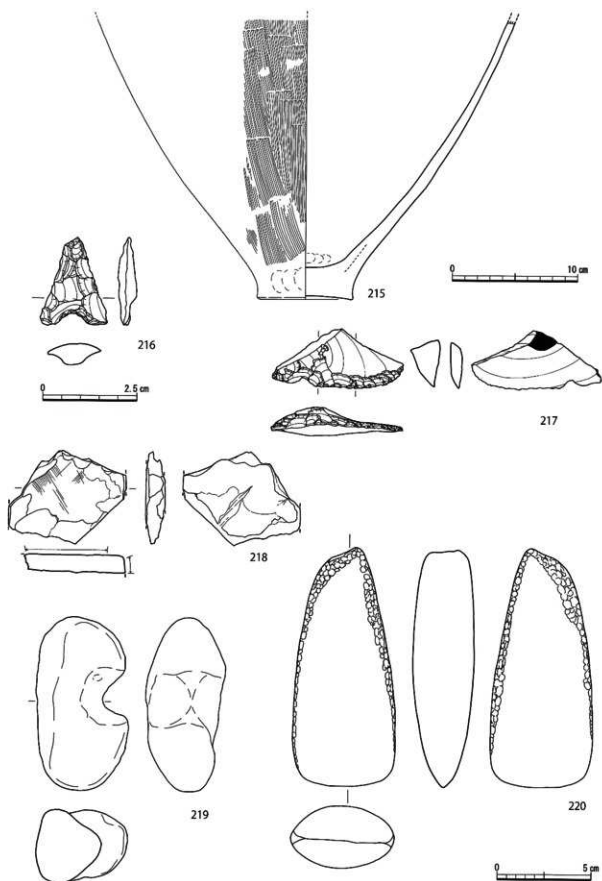
第45図 包含層北西部 出土遺物実測図 1/2 (188・189・190は1/1)



第 46 図 包含層一括 出土遺物実測図 1/3 (207 は 1/2)



第 47 図 表採 出土遺物実測図 1/3



第 48 図 表採 出土遺物実測図 1/2 (215は 1/3 216は 1/1)

第4章 まとめ 総括

旧石器時代

近年、別府市から日出町周辺において採集された旧石器時代後期の石器類が資料化されている（越知他2008、2009、2011、2012）。また同時代の石器類が出土したエゴノクチ遺跡や下野遺跡の調査報告書も刊行されたこともあり、遺跡数が急増するとともに、この地域の特徴もかなり詳らになってきた。例えば、各種のナイフ形石器、有茎剥片尖頭器、角錐状石器、細石刃・細石刃核などAT以前から以後にかけての石器類が採取・出土している。羽室遺跡もそうした遺跡群の一角を占める別府市域で旧石器時代遺跡として最初に調査された遺跡であり、少量ではあるが、その出土層位からすれば貴重な事例となる。羽室遺跡の特徴としては、次の4つに集約できる。

1：石器類の出土層位がAT・黒色帯などより上位の黄褐色ローム層である。

2：角錐状石器を含んでいる。

3：石器の石材に多様性がある。

4：小型剥片や破片などが数量的に少なく、剥片剥離作業を行った痕跡がほとんどうかがえない。

1の出土層位からすれば、AT降下以降の時代的な領域で捉えられることを示している。この点は、2の角錐状石器がこの地層領域における極めて特徴的な石器であることと整合する。その上で旧石器集中部という小規模な石器ブロックに指標的な角錐状石器が伴ったことは、AT降灰後の旧石器編年茶屋久保遺跡B地区等の段階に位置づけられる。3については、大野川系の流紋岩供給圏のなかでも遠隔地であり、周辺地域からの石材補給の様子がうかがえる。4については、保持していた石材が少なく、小さくなったこともあり、大掛かりな剥片剥離や石器製作の痕跡がうかがえない。

剥片剥離技術的な面から石器の表面を観察すると、出土した石器や剥片にみられる素材のボジ面が斜行するものや、ネガ面の剥離面が相対する例がある。このうち扁平な断面を有する例は、円盤形に近い石核から剥離されたことが推定される。断面が三角形の角張った形態の剥片は、打面を90度移動して稜を取り込んでいることからサイコロ状・多面体状の石核から剥離されたと推定される。資料があまりに少ないため、当時の旧石器人が保持していた技術の全てを反映しているわけではないが、茶屋久保遺跡B地区（豊後大野市）や駒方池迫遺跡（豊後大野市）の組成の幾つかに対応する技術であり、齟齬はない。

縄文時代

今回調査された竪穴建物跡は、縄文後期の鐘崎式土器を中心に伴うものである。羽室遺跡の発掘調査が実施された当時、大分県内の縄文時代の竪穴建物の調査例はまだ数が少なかったが、2007年に竹田市坂田西遺跡で、縄文時代後期の竪穴建物跡が3基、2008年～2009年には、佐伯市森の木遺跡で縄文時代草創期の竪穴建物跡が21基確認されるなど、近年は調査例が増加している。竪穴建物及び包含層から出土した土器のうち14及び15は、縄文後期前葉の鐘崎式土器の特徴を示すものである。16については、入組渦文が表現されているもので、鐘崎式土器に後出する可能性をもつ土器である。このことから、SH01は縄文時代後期前半から中葉にかけての過渡期的な時期にあたるものと思われる。

なお、別府市内には、さらに後出する西平式土器が出土する実相寺春木遺跡の他、春木遺跡、末行遺跡、四郎丸遺跡などでも縄文時代後期の遺跡が確認されている。石器については、石鏃（188、189、190、216）やスクレイパー（142、217）、打製石斧（145）が出土した。石鏃やスクレイパーの素材は姫島産黒曜石が大半を占める。礫石器は磨製石斧（220）、凹石（77、197、198）がある。磨製石斧は、花崗岩製で使用石材としてはあまり例がない。凹石は一般的な素材である安山岩を用いている。

弥生時代

今回の調査では、竪穴建物3基、土坑13基が検出された。このうちSH02は主柱穴が1本も確認されていない

ことから、倉庫もしくは貯蔵穴として用いられた可能性が高い。そうすると竪穴建物は2基ということになる。切り合った状態で検出された2基の竪穴建物も削平のため、遺構の残りはあまりよくない。土器については、下城式土器が僅かに出土するが、「く」字状口縁を持つ北部九州系の土器が主体を占める。さらに鐮先状口縁を持つ須玖Ⅱ式土器が共存する。石器については、太形蛤刃石斧(25、105)、扁平片刃石斧(192)、石包丁(193)、石剣(59)などの磨製石器が出土した。そのほか土製紡錘車(57)や投弾も出土している。投弾は土製(58)、石製(199)がある。磨製石器に関しては、出土量は少ないが弥生時代の磨製石器の典型的な組み合わせである。出土土器から羽室遺跡は弥生時代中期後半の時期と考えられる。その中でも、出土した土器を見ると、須玖Ⅱ式土器を中心に、下城式土器の甕がともなっている。下城式土器の甕は突帯を1条もしくは2条貼りつけているが、後者が多い。更には本遺跡の下城式土器の甕は、胴部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上る新相の下城式である。胴がやや張り、内傾気味に立ち上がる古相の下城式土器は1点も出土していない。須玖Ⅱ式土器と下城式土器の新相との並行関係を示す重要な事例と考えられる。

中 世

中世の遺物は、包含層から出土した遺物が中心となる。出土した土師質土器の坏(123、140、183、184、185、186)のうち、140、184は口径が12.8cm、器高が低く底部から体部への立ち上がりも緩やかに立ち上がる。それに比べて123、183、185は口径はほとんど変わらないが、底部から体部への立ち上がりが140や184と比べると角度を持って立ち上がる。186は口径が11.5cmと小ぶりである。これらの土師質土器は12世紀から14世紀にかけての所産と思われる。また206は、京都系土師器で16世紀後半代である。

輸入陶磁器類については、玉縁の白磁碗(75)が12世紀、龍泉窯の青磁碗(180)が13世紀、青花皿(179)は青花皿B群にあたり16世紀前半、瀬戸美濃産の御皿(76)は14世紀から15世紀、備前焼の播鉢(118~120)は16世紀前半、土師質の火鉢(187)が15世紀後半~16世紀前半、青花皿(116)は16世紀後半、青磁の香炉(181)も16世紀後半とそれぞれ比定されることから、最も古い時期が13~14世紀、次いで15世紀後半から16世紀前半代、さらに16世紀の後半代とⅢ時期に細分化することが出来る。

羽室遺跡の西約700mの場所に中世に竈門荘の地頭職をつとめていた竈門氏の墓地がある。この竈門荘の歴史は古く、宇佐八幡弥勒寺領として寄進されたもので成立時期は平安時代まで遡るとされている。竈門荘の範囲は「八幡竈門神社伝記」によると「内竈門、野田、小坂、古市、亀川、平田、北鉄輪、南鉄輪、小浦」とあり、羽室遺跡が所在する野田地区が含まれている。さらに、弘安年間に作成された「豊後国図田帳」(1285)の中に「御家人竈門又太郎貞繼」という人名の記載があることと竈門氏墓地との立地関係から、13世紀に入り、この羽室遺跡を含む一帯が竈門氏の勢力下にあったことが考えられる。

参考文献 別府市 1985 『別府市史』

遺物観察表①

土 器

原産品物 番号	遺物 番号	種類	時期	注()は復元 口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様・調整	胎土 色	底土 色	備 考
24	14 SH01	深鉢	縄文	5.0+α			ヨコ方向の調整後沈線 条痕(巻目)	淡黄色	ナデ 風化著しい	多	多	鐘崎式
	15 SH01	深鉢	縄文	7.6+α			条痕	淡黄色	ナデ	多	多	鐘崎式
	16 SH01	深鉢	縄文	9.1+α			研磨 RLの縄文	褐色	磨滅	多	多	
	17 SH01	深鉢	縄文	4.8+α			ナデ	褐色	ナデ 一部磨滅	多	多	
	18 SH01	深鉢	縄文	4.6+α			ナデ	淡褐色	ナデ	多	多	
	19 SH01	深鉢	縄文	4.5+α			磨滅	淡黄色	磨滅	多	多	
	20 SH01	深鉢	縄文	3.7+α			磨滅	黄褐色	ナデ	多	多	
	21 SH01	深鉢	縄文	4.3+α			磨滅	淡黄色	ナデ	多	多	
	22 SH01	深鉢	縄文	10.4+α			磨滅	褐色	磨滅	多	多	
	23 SH01	深鉢	縄文	1.8+α (7.2)			磨滅	灰褐色	磨滅	多	多	
	24 SH01	深鉢	縄文	3.3+α (7.2)			ナデ	褐色	磨滅	多	多	
	26 SH02	深鉢	縄文	5.0+α			ナデ(割離) 沈線 凹線文	黄褐色～褐色・褐色	ナデ	多	多	
	27 SH02	壺	弥生	5.0+α			ヨコナデ ナデ	にぶい黄褐色～灰褐色	ヨコナデ ナデ	多	多	
	28 SH02	壺	弥生	6.0+α			ナデ 突帯貼付	にぶい黄褐色～黄褐色	ナデ	多	多	
25	29 SH02	壺	弥生	7.4+α			ナデ ヨコナデ ハケ目(磨滅)	にぶい黄褐色	ナデ ヨコナデ	多	多	
	30 SH02	壺	弥生	7.4+α			ヨコナデ ナデ 突帯貼付	にぶい黄褐色～灰褐色	ナデ ヨコナデ	多	多	
	31 SH02	壺	弥生	(32.8) 6.8+α			ヨコナデ 指頭圧痕	黄褐色～褐色	ナデ ヨコ方向磨目	多	多	
	32 SH02	壺	弥生	4.0+α 5.6			ナデ 磨滅	黄褐色～灰褐色	ナデ 磨滅	多	多	
	33 SH02	壺	弥生	6.8+α 6.8			ナデ ヨコナデ	赤褐色	ナデ	多	多	
	34 SH02	壺	弥生	5.7+α (7.2)			ナデ ヨコナデ ナデ	にぶい黄褐色～褐色	シボリ痕 ヨコナデ	多	多	丹塗り
	35 SH03	壺	弥生	(12.1) 9.1+α			コノ字突帯	赤茶褐色	ナデ 磨滅	多	多	
	36 SH03	壺	弥生	8.4+α			ナデ M字突帯貼付	にぶい黄褐色	ナデ 指圧痕	多	多	
	37 SH03	壺	弥生	(30.4) 11.4+α			ナデ 突帯貼付	褐色	ナデ 指圧痕	少	少	口縁部に浮文あり
	38 SH03	壺	弥生	(30.8) 8.0+α			磨滅	褐色	磨滅	少	少	口縁部に浮文あり
	39 SH03	壺	弥生	5.6+α			軽い割目の可能性 磨滅	褐色	ナデ	少	少	下城式
	40 SH03	壺	弥生	5.6+α			ヨコナデ ナデ 突帯貼付	灰黄褐色	ナデ ヨコナデ	多	多	
	41 SH03	壺	弥生	6.4+α			ヨコナデ 突帯貼付	褐黄色	ヨコナデ 工具ナデ	少	少	
27	42 SH03	壺	弥生	7.8+α			ヨコナデ 突帯貼付 タテ方向のハケ後ナデ	にぶい黄褐色	磨滅	少	少	
	43 SH03	壺	弥生	15.0+α			ナデ 磨滅 タテ方向のハケ後ナデ	にぶい褐色	ナデ 磨滅	多	多	
	44 SH03	壺	弥生	(24.4) 5.2+α			磨滅	にぶい黄褐色～灰褐色	磨滅	多	多	
	45 SH03	壺	弥生	7.2+α			ナデ 少し磨滅 突帯貼付	にぶい黄褐色～褐色	ナデ 少し磨滅	多	多	丹塗り(内外面)
	46 SH03	壺	弥生	(25.6) 14.3+α			ナデ	淡褐色	ナデ	少	少	
	47 SH03	壺	弥生	29.2 21.0+α			ナデ 磨滅 ヨコ方向のハケ目(磨滅)	にぶい褐色	ナデ 磨滅	多	多	黒斑あり
	48 SH03	壺	弥生	(29.2) 28.7+α			ヨコナデ タテ方向のハケ後ナデ	明褐色～褐色	ナデ 磨滅	多	多	黒斑あり 外面に赤色顔料
	49 SH03	壺	弥生	(33.0) 13.3+α			磨滅	褐灰色	磨滅	多	多	内面に赤色顔料
	50 SH03	壺	弥生	24.0+α			ナデ M字突帯貼付 ミガキ(磨滅)	にぶい黄褐色	ナデ	多	多	外面に赤色顔料
	51 SH03	壺	弥生	(47.8) 16.0+α			ヨコナデ 突帯貼付 ナメ方向のハケ後ナデ(磨滅)	淡褐色	磨滅	多	多	外面に赤色顔料
	52 SH03	壺	弥生	3.5+α 6.2			ハケ目 磨滅	褐色～黒褐色	磨滅	多	多	
	53 SH03	壺	弥生	3.6+α 7.2			磨滅	にぶい黄褐色～灰褐色・褐色	磨滅	多	多	
	54 SH03	壺	弥生	5.8+α 6.3			磨滅	黄褐色～黒褐色	磨滅	多	多	
30	55 SH03	壺	弥生	8.5+α (7.2)			ヨコナデ タテ方向のハケ後ナデ	にぶい褐色	ナデ	少	少	外面に赤色顔料
	56 SH03	壺	弥生	14.0+α			ヨコ方向のミガキ(磨滅)	にぶい褐色	ナデ	少	少	
	61 SH04	壺	弥生	(29.2) 8.0+α			ヘラミガキ 突帯貼付	灰黄褐色	ナデ(指圧痕)	多	多	
	62 SH04	壺	弥生	4.3+α			ナデ 突帯貼付	にぶい黄褐色	ナデ	多	多	
	31 SH04	壺	弥生	8.4+α (9.6)			ハケ後ナデ ヨコナデ	黄褐色～褐色 一部黒褐色	工具ナデ後ナデ ヨコナデ	多	多	
	64 SH04	壺	弥生	4.8+α			ヨコナデ ハケ目 磨滅	黄褐色～灰褐色	ヨコナデ ナデ	多	多	
	65 SH04	壺	弥生	4.8+α			ヨコナデ ハケ後ナデ 突帯貼付	にぶい黄褐色～黒褐色	ナデ ヨコナデ	少	少	下城式
	66 SH04	壺	弥生	(21.0) 5.2+α			ヨコナデ ヘラミガキ 指圧痕	灰黄褐色	ヨコナデ ヘラミガキ	多	多	
	67 SH04	壺	弥生	(25.0) 8.0+α			ヨコナデ ナデ	黄褐色～黒褐色	ヨコナデ ナデ	多	多	
	68 SH04	壺	弥生	(29.2) 5.0+α			ヨコナデ ハケ後ナデ	黄褐色～灰褐色	ヨコナデ ナデ	多	多	
	69 SH04	壺	弥生	(34.4) 8.6+α			ヨコナデ後工具ナデ ハケ目 磨滅	にぶい黄褐色	ヨコナデ 工具ナデ	多	多	
	70 SH04	壺	弥生	(37.4) 8.0+α			ヨコナデ 磨滅 突帯貼付	黄褐色～にぶい褐色	ナデ ヨコナデ	多	多	
	71 SH04	壺	弥生	(37.4) 8.5+α			突帯貼付 ハケ目	褐色 黄褐色 灰褐色	ナデ ヨコナデ	多	多	
	72 SH04	壺	弥生	3.4+α 6.2			ナデ ヨコナデ	灰褐色～黄褐色～褐色	磨滅	多	多	
33	73 SH04	壺	弥生	6.0+α (7.2)			ナデ ヨコナデ ハケ後ナデ	にぶい黄褐色～黒褐色	ナデ	少	少	
	74 SH04	壺	弥生	8.0+α 6.2			ハケ後ナデ 指ヨコナデ	にぶい黄褐色～黄褐色・灰褐色	ナデ	多	多	
	75 SH04	碗	中世	1.2+α			ヨコナデ	灰白色	ヨコナデ	多	多	陶磁器/白磁/玉縁
	76 SH04	加皿	中世				糸切り 露胎	灰白色～灰オレンジ色	カキ目 施釉	多	多	陶磁器/瀬戸美濃
34	SD01	壺	中世	(12.4) 6.6+α			ヨコナデ 樹皮波状文	暗赤褐色	ヨコナデ	多	多	備前

遺物観察表②

図版番号	遺物番号	遺物名	時期	重量(g)	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様・調整	胎土 角長石	備考
	79	SK01	壺 弥生		4.0+α			ナデ 刻目突帯	茶褐色	ナデ		多 下城式
	80	SK01	壺 弥生	(29.7)	9.7+α			磨減 ハケ目	黄褐色～灰黄褐色	磨減		多
	81	SK01	壺 弥生	(39.8)	25.3+α			ヨコナデ 突帯貼付 タテ方向のハケ後ナデ	淡褐色	ナデ 磨減		少 外面に黒斑
35	82	SK01	壺 弥生		4.6+α	5.6		磨減	にぶい褐色	ナデ 磨減		多 内面にス付
	83	SK01	壺 弥生		5.1+α	5.1		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ 磨減	にぶい褐色	工具ナデ		少
	84	SK01	壺 弥生		7.9+α	9.4		ナメ方方向のハケ目 ナデ 磨減	淡褐色 褐色	ナデ		多
	85	SK01	壺 弥生		11.0+α			ナデ 磨減	淡褐色 浅黄褐色	シボリ痕 ナデ		多
	86	SK01	壺 弥生		2.7+α	(6.3)		磨減	灰褐色	割離		少
	87	SK01	壺 弥生		2.3+α	6.2		ヨコナデ 磨減	にぶい褐色	磨減		少
	88	SK01	壺 弥生		3.7+α	5.5		タテ方向のハケ目(磨減) ヨコナデ	褐色	磨減		少
	89	SK01	壺 弥生		4.7+α	5.4		磨減	褐色	ナデ 磨減		多
	90	SK01	壺 弥生		4.6+α	(7.3)		磨減 剥落	暗褐色	磨減		多
	91	SK01	壺 弥生		3.6+α	5.8		ヨコナデ タテ方向のハケ目	にぶい褐色～灰褐色	工具ナデ		少
	92	SK01	壺 弥生		5.7+α	6.1		磨減	にぶい褐色	磨減		多
	93	SK01	壺 弥生		5.8+α	6.4		磨減	にぶい褐色	磨減		多
36	94	SK01	壺 弥生		4.6+α	5.3		タテ方向のハケ目 ヨコナデ	にぶい黄褐色	工具ナデ		少
	95	SK01	壺 弥生		3.9+α	6.2		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	にぶい褐色	工具ナデ		少
	96	SK01	壺 弥生		4.9+α	6.8		タテ方向のハケ後ナデ	にぶい褐色	ナデ 磨減		多
	97	SK01	壺 弥生		5.3+α	6.6		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	にぶい褐色	ナデ		少
	98	SK01	壺 弥生		6.4+α	6.6		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	にぶい黄褐色	ナデ		少
	99	SK01	壺 弥生		5.5+α	7.3		ヨコナデ タテ方向のハケ目(磨減)	にぶい褐色	ナデ 磨減		少
	100	SK01	壺 弥生		6.0+α	5.9		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	淡黄褐色	ナデ		少
	101	SK01	壺 弥生		5.1+α	5.3		磨減	淡褐色	磨減		少
	102	SK01	壺 弥生		6.8+α	6.9		タテ方向のハケ目(磨減) ヨコナデ	褐色	ナデ		多
	103	SK01	壺 弥生		6.3+α	6.0		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	にぶい褐色	ナデ		少
	104	SK01	壺 弥生		8.0+α	7.8		磨減 ハケ目	黄褐色～灰褐色	磨減 ハケ目		多
37	106	SK12	壺 弥生					ナデ 突帯貼付	黒褐色	磨減		多
	107	SK12	壺 弥生					ナデ 突帯貼付	にぶい褐色	ナデ 指圧痕		石灰多い
	108	SK12	壺 弥生		5.0+α	(5.7)		タテ方向のハケ後ナデ ナデ	淡褐色	ナデ		少
	109	SK13	壺 弥生		3.2+α			ナデ 刻目突帯	黒褐色	ナデ		少
	110	SK13	壺 弥生		8.0+α			ナデ ヨコナデ	褐色 にぶい黄褐色	ナデ ヨコナデ		多
	111	SK13	壺 弥生	(18.8)	7.0+α			磨減	黒色 灰黄色 にぶい褐色	磨減		多
	112	SK13	壺 弥生	(25.6)	6.3+α			磨減	浅黄褐色～にぶい褐色	磨減		多
38	113	SK13	壺 弥生		4.0+α	(6.2)		ナデ 磨減	黄褐色 灰褐色	ナデ		多
	114	SK13	壺 弥生		2.3+α	(6.0)		磨減	黒色 にぶい黄色	磨減		多
	115	SK13	鉢 中世		4.1+α	(6.6)		磨減 高台貼付	褐色～にぶい褐色	磨減		多
	116	SK13	皿 中世		(15.0)			磨減 露胎	明緑灰色 紺色～水色	施釉		陶磁器/青花
	117	SK13	鉢 中世		2.0+α	(5.8)		磨減 露胎	明緑灰色 紺褐色	施釉		青磁
	118	SK13	鉢 中世					ナデ	黄褐色	磨り目		少 瓦質
	119	SK13	鉢 中世		6.6+α			ナデ	褐色	磨り目		多
	120	SK13	鉢 中世		6.7+α			ナデ	褐色	ナデ 磨り目		磨前
39	122	金倉 北条	小皿 中世	(7.6)	1.0	(6.2)		ヨコナデ 糸切り	褐色～赤褐色	ナデ ヨコナデ		少 土師質土器
	123	金倉 北条	杯 中世	(12.8)	3.55	8.2		ヨコナデ 糸切り(磨減)	黄褐色	ナデ ヨコナデ		多 土師質土器
	124	金倉 北条	壺 弥生	(32.0)	11.5+α			ヨコナデ 突帯貼付 ナメ方 方向のハケ目(磨減)	褐色	ヨコナデ ナデ		多
40	125	金倉 北条	磨鉢 中世		7.0+α			ヨコナデ	灰色	ヨコナデ		少 磨前
	126	金倉 北条	壺 中世		15.0+α	(23.0)		ヨコナデ ナデ	灰色	ヨコナデ		少 磨前
	127	金倉 北条	壺 中世		20.0+α	(31.8)		タテ・ヨコ方向の工具ナデ	暗赤褐色	工具ナデ		多 外面「ハ」の刻印
	128	金倉 北条	壺 弥生		9.4+α			ヨコナデ 突帯貼付 タテ方向のハケ後ナデ	暗褐色	ナデ		多
	129	金倉 北条	壺 弥生		6.6+α			タテ方向のハケ目	暗褐色	磨減		少
	130	金倉 北条	壺 弥生		6.6+α			ヨコナデ ナデ	淡褐色	ヨコナデ ナデ		少
	131	金倉 北条	壺 弥生		4.4+α			磨減 穿孔	にぶい褐色	磨減 穿孔		多
	132	金倉 北条	壺 弥生	(17.5)	5.0+α			ナデ 磨減	淡黄色	ナデ 磨減		多
41	133	金倉 北条	鉢 弥生		6.0+α			指ナデ 指圧痕	にぶい褐色	指ナデ 指圧痕		多
	134	金倉 北条	壺 弥生		3.8+α	(4.7)		タテ方向のハケ後ナデ	にぶい褐色	ナデ		少
	135	金倉 北条	壺 弥生		5.2+α	(6.3)		タテ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	にぶい褐色	工具ナデ		多
	136	金倉 北条	壺 弥生		3.0+α	6.2		磨減 工具ナデ	にぶい黄褐色 黄褐色	ナデ		多
	137	金倉 北条	壺 弥生		3.2+α	6.2		ナデ	黄褐色	ナデ		多
	138	金倉 北条	鉢 中世					施釉	オリブ灰色	施釉		青磁
	139	金倉 北条	鉢 中世		1.9+α	(5.0)		施釉 露胎	緑灰色	ナデ		多 内外面に貫入あり
	140	金倉 北条	杯 中世	(12.8)	2.3	7.3		回転ヨコナデ 回転糸切り	灰白色 灰色	回転ヨコナデ ナデ		多 在地土師質土器

遺物観察表③

調査 番号	遺物 番号	遺物 名称	時期	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	外蓋の文様・調整	外面色調	内面の文様・調整	加工 内容	備 考
42	146	奈良 弥生	縄文				沈線	にぶい褐色	ナデ	少	縄文式 石英少量
	147	〃 〃	弥生	4.5+α			ヨコナデ ナデ 刻目突帯	淡黄色	ナデ	多	下城式
	148	〃 〃	弥生	5.3+α			ヨコナデ ナデ 刻目突帯	淡黄色	ナデ	多	下城式
	149	〃 〃	弥生	2.9+α			ナデ 刻目口縁 刻目突帯	褐色	ナデ	少	下城式
	150	〃 〃	弥生	5.0+α			刻目口縁 ナデ 刻目突帯	黒褐色	ナデ	少	下城式
	151	〃 〃	弥生	4.6+α			ヨコナデ 刻目突帯 磨滅	褐色	ナデ	少	下城式
	152	〃 〃	弥生	6.2+α			ヨコナデ 刻目突帯 ハケ目	にぶい褐色	ハケ目 ナデ	少	下城式 石英少量
	153	〃 〃	弥生	5.0+α			ナデ 磨目突帯	褐色	ナデ	多	下城式
	154	〃 〃	弥生	4.4+α			ヨコナデ 刻目突帯	にぶい褐色	ヨコナデ	少	下城式 石英少量
	155	〃 〃	弥生	5.1+α			磨滅 刻目突帯	褐色	磨滅	少	下城式
	156	〃 〃	弥生	(27.1)	13.6+α		ヨコナデ ハケ目 刻目突帯	にぶい黄褐色	ヨコナデ 工具ナデ	少	下城式 石英少量
	157	〃 〃	弥生		4.2+α		ナデ 突帯貼付 勾玉状浮文 ナメ方向のハケ目	茶褐色	ナデ	多	
	158	〃 〃	弥生		6.3+α		ヨコナデ 突帯貼付	淡褐色 赤褐色	ヨコナデ 指圧痕	少	
	159	〃 〃	弥生		3.8+α		磨滅 刻目突帯	褐色	工具ナデ	多	
	160	〃 〃	弥生	(14.2)	3.7+α		ヨコナデ ナデ	にぶい黄褐色	ヨコナデ	少	
	161	〃 〃	弥生	(21.8)	11.2+α		ヨコナデ ナデ 突帯貼付	褐色 褐色	ヨコナデ ナデ	多	
43	162	〃 〃	弥生		4.8+α		ヨコナデ ナデ 丁寧なナデ	茶褐色	ヨコナデ 丁寧なナデ	多	全面に丹塗り
	163	〃 〃	弥生	(25.8)	4.2+α		ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	多	
	164	〃 〃	弥生		7.7+α		ヨコナデ ナデ	灰白色	ナメ・ヨコ方向 のハケ目	少	
	165	〃 〃	弥生	(35.0)	5.7+α		ヨコナデ 突帯	明褐色	ヨコナデ	少	石英少量
	166	〃 〃	弥生	(25.4)	10.0+α		ヨコナデ ハケ目	にぶい黄褐色	ナデ	少	石英少量
	167	〃 〃	弥生	(25.0)	25.6+α		ヨコナデ ナメ方向のハケ目(磨滅)	淡赤褐色 褐色	ヨコナデ ナデ	多	内面一部に磨滅 外面にスス付着
	168	〃 〃	弥生	(25.0)	21.5+α		ヨコナデ タテ方向のハケ目	灰褐色 褐色	ヨコナデ ナデ	多	
	169	〃 〃	弥生		4.2+α	5.2	ナデ	明赤褐色	ナデ	少	石英少量
	170	〃 〃	弥生		5.8+α	(7.2)	ナデ	褐色	ナデ	多	
	171	〃 〃	弥生		13.6+α	6.7	ナメ方向のハケ目 ナデ 磨滅	にぶい黄褐色	ナデ	多	
	172	〃 〃	弥生		16.4+α	6.1	ナデ	にぶい黄褐色	ナデ 指圧痕	少	外面にスス付着
	173	〃 〃	弥生		3.8+α		ナデ	褐色	丁寧なナデ	多	
	174	〃 〃	弥生	(28.3)	16.0+α		ヨコナデ ナメ方向のハケ目(磨滅)	褐色	ヨコナデ ナデ	多	
	175	〃 〃	弥生		7.8+α		ヨコナデ ハケ目	にぶい黄褐色	ヨコナデ ナデ	少	石英少量
44	176	〃 〃	弥生		2.6+α	5.4	磨滅 磨滅(高台)	明緑灰色	磨滅		陶器
	177	〃 〃	弥生	(12.8)	2.8	7.3	磨滅 一部磨滅	灰白色	磨滅		検付 内外面に貫入あり
	180	〃 〃	弥生	(16.7)	2.9+α		磨滅 磨滅(高台)	オリブ灰色	磨滅		磨滅系青磁
	181	〃 〃	弥生				磨滅	オリブ灰色	磨滅 磨滅		青磁 貫入あり
	182	〃 〃	弥生	7.7	1.25	6.7	ヨコナデ 糸切り痕(磨滅)	にぶい褐色	ヨコナデ	多	石英少量
	183	〃 〃	弥生	(10.7)	3.6	(6.3)	回転ヨコナデ 回転糸切り	明赤褐色	回転ヨコナデ	多	角閃石非常に多い
	184	〃 〃	弥生	12.8	2.4	9.7	回転ヨコナデ 回転糸切り	褐色	回転ヨコナデ ナデ	多	在地系土質土層
	185	〃 〃	弥生	(12.9)	3.2	9.2	回転ヨコナデ 回転糸切り	にぶい褐色	回転ヨコナデ	多	在地系土質土層
	186	〃 〃	弥生	(11.5)	3.6	(8.2)	回転ヨコナデ 回転糸切り	にぶい褐色	回転ヨコナデ	多	角閃石非常に多い
	187	〃 〃	弥生		5.4+α		ヨコナデ 突帯 スタンプ(菊花)文	にぶい褐色	ナデ	少	土師質
45	200	〃 〃	弥生		3.0+α		巻貝状痕	褐色	ナデ	多	縄文式
	201	〃 〃	弥生	(23.2)	8.2+α		ヨコナデ ナデ	淡黄色 褐色	ナデ	多	
	202	〃 〃	弥生	(26.0)	12.7+α		ヨコナデ 磨滅	茶褐色	ヨコナデ 磨滅	多	
	203	〃 〃	弥生		2.9+α	6.4	ヨコナデ	灰白色	ナデ	多	石英少量
	204	〃 〃	弥生		4.1+α	(6.4)	丁寧なナデ ナデ	褐色 黒褐色	ナデ	多	内面一部割落
	205	〃 〃	弥生	(8.0)	1.0	6.6	回転ヨコナデ 回転糸切り	褐色	ナデ 回転ヨコナデ	多	在地系土質土層
	206	〃 〃	弥生	(8.4)	1.8		ヨコナデ ナデ	にぶい褐色	ヨコナデ	多	口縁端部にスス 付着 京系土師質
	208	〃 〃	弥生	(36.1)	7.2+α		磨滅	暗褐色	磨滅	多	
	209	〃 〃	弥生		10.2+α		ナデ M字突帯貼付	にぶい褐色	ナデ	多	
	210	〃 〃	弥生	(27.8)	9.7+α		ヨコナデ タテ方向のハケ後ナデ	茶褐色	ヨコナデ ナデ	少	
47	211	〃 〃	弥生	(28.0)	11.7+α		ヨコナデ タテ方向のハケ後ナデ	茶褐色	ヨコナデ 工具ナデ後ナデ	少	
	212	〃 〃	弥生		3.8+α		ナデ 穿孔	にぶい黄褐色	ナデ 穿孔	少	
	213	〃 〃	弥生		2.9+α	5.0	磨滅	茶褐色～褐色	ナデ	多	
	214	〃 〃	弥生		4.6+α	5.8	ヨコナデ タテ方向のハケ後ナデ	明褐色	ナデ	少	
	215	〃 〃	弥生		22.0+α	(7.3)	タテ方向のハケ後ナデ 無オシエナデ	褐色	ナデ 指圧痕	多	

遺物観察表④

旧石器

図版番号	遺物番号	出土遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
21	1	旧石器包含層	ナイフ形石器	角閃石安山岩	3.1	1.7	0.8	3.7
	2	包含層一括	加工痕ある剥片	流紋岩	3.8	3.2	1.1	16.1
	3	SH03	角鋸状石筥	チャート	3.9	1.5	0.9	5.0
	4	包含層一括	剥片	サヌカイト	4.0	2.0	0.7	5.0
	5	包含層南西部	剥片	チャート	3.5	1.0	0.7	1.7
	6	旧石器包含層	剥片	鉄石炭	6.6	2.2	1.45	23.8
	7	//	剥片	流紋岩	3.8	1.9	0.4	2.9
22	8	//	剥片	流紋岩	1.95	2.2	0.3	1.1
	9	//	石板	流紋岩	2.9	4.0	1.6	15.2
	8+9	//	接合面	流紋岩	3.3	4.0	1.6	16.3
23	10	//	剥片		4.0	3.9	0.9	11.4
	11	包含層南西部	使用痕ある剥片	流紋岩	2.8	2.2	0.65	4.8
	12	旧石器包含層	剥片	黒曜岩	1.6	1.9	0.35	1.3
	13	表採	石板	流紋岩	4.7	3.0	2.0	22.7

石器

図版番号	遺物番号	出土遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
24	25	SH01	石斧	珒岩	10.3	4.3	2.8	227.3
	58	SH03	投弾	安山岩	2.0	2.4	1.8	9.6
	59	SH03	石剣か?	片岩	8.3	3.2	0.6	31.5
	60	SH03	磨製石ノミ	結晶片岩	9.4	2.1	0.8	27.1
33	77	SH04	凹石	安山岩	8.5+ α	11.9	4.8	540
	105	SK01	太形鋭角石斧	珒岩	13.9	6.7	4.3	682.2
	141	包含層南西部	礫石	砂岩	7.4	3.2	1.8	56.3
	142	//	スクレイパー	姫島産黒曜石	3.9	2.6	1.25	14.0
41	143	//	二次加工剥片	姫島産黒曜石	4.7	4.1	1.0	16.6
	144	//	礫石	粘板岩	9.8	4.5	2.2	118.8
	145	//	打製石斧	安山岩	12.3	6.8	1.3	165.5
	188	包含層北西部	石剣	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.6
45	189	//	石剣	姫島産黒曜石	1.9	1.9	0.6	1.6
	190	//	石剣	姫島産黒曜石	3.4+ α	2.0+ α	0.4	2.2
	191	//	磨製石斧	珒岩	3.8	4.3	1.1	20.5
	192	//	磨製石ノミ	粘板岩	2.9	1.6	0.9	6.2
	193	//	石包丁	粘板岩	2.9	4.7	0.6	10.8
	194	//	礫石	砂岩	3.8	5.6	1.7	48.9
	195	//	礫石	砂岩	3.3	3.5	0.5	7.9
	196	//	石剣	滑石	8.0	2.8	1.3	56.0
	197	//	凹石	安山岩	7.2+ α	10.7	4.6	520
	198	//	凹石	安山岩	10.1	7.0	4.7	4690
	199	//	投弾	安山岩	2.4	2.7	2.0	15.2
	207	包含層一括	礫石	砂岩	3.2+ α	3.2+ α	1.0	7.9
	216	//	石剣	サヌカイト	2.3	1.8	0.5	1.2
	217	//	スクレイパー	姫島産黒曜石	3.2	7.0	1.5	17.5
	218	//	礫石	砂岩	5.0	6.2	1.1	33.2
46	219	表採	石剣	砂岩	5.0	9.2	4.1	191.8
	220	//	石斧	花崗岩	12.8	5.5	3.3	392.0

土製品

図版番号	遺物番号	出土遺構	種類	色調	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
30	57	SH03	紡錘車	赤褐色～褐色	5.2		1.3	40.7
	121	SK13	投弾	赤褐色	3.3	2.2		14.6
44	176	包含層北西部	紡錘車	赤褐色～褐色	5.6		0.9	26.6
	177	包含層北西部	土罐		2.6+ α	1.7	0.6	5.6

写真図版



調査区南東を望む



調査区北西より



SH01 発掘状況



SH01 完掘状況



SH01 遺物出土状況



SH02 発掘状況



SH02 中央付近のカーボンの様子



SH03 発掘状況



SH03 遺物出土状況



SH03 完掘状況



SH03 中央付近の凹みの様子



SK01 発掘状況



SK01 遺物出土状況



SK02 発掘状況



SK13 発掘状況



ST01 石棺



旧石器時代遺物出土状況①



旧石器時代遺物出土状況②

图版 4





49



50



51



55



57



58



59



60



63



65



66



69



71



74



75



76



77



78



81



84



85



93



102



99



101



105



107



111



116





171



172



176



179



180



181



182



184



185



186



188



193



196



197



189



195



201



209



210



215



217



219



220

報告書抄録

ふりがな	はむろいせき
書名	羽室遺跡
副書名	大分県立別府羽室台高等学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	江田 豊 綿貫 俊一 松木 晴美
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61 TEL 097(552)0077
発行年月日	2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はむろいせき 羽室遺跡	べっぶしおおあざのだ あざはむろ 別府市大字野田 字羽室	202	015	33° 19' 17"	131° 29' 12"	1982.4.20 } 1982.8.31	7,000	学校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽室遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中世	竪穴建物 土坑・溝 石棺	縄文土器 弥生土器 陶磁器 石器	
要 約	<p>大分県立別府羽室台高等学校の建設に伴い発掘調査を行った。調査地点は別府市大字野田の丘陵地標高110m～120mに位置する。</p> <p>発掘調査では、旧石器時代の包含層からツールや剥片類が出土した。また縄文時代後期の竪穴建物跡1基、弥生時代の竪穴建物跡4基、貯蔵穴2基、小児用石棺墓1基、中世の溝1条、多数のピットが確認された。さらに、黒褐色土層中から弥生土器を中心に多数の遺物が出土したため包含層一括資料として遺物の取り上げを行った。</p>				

羽 室 遺 跡

大分県立別府羽室台高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第96集

平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61

TEL 097(552)0077

印刷 株式会社 電子印刷センター

〒874-0011 大分県別府市大字内蔵1393番地
